第二十一巻

〔第一段〕　詞書

上人つねに仰られける御詞」

上人の給はく、口傳なくして浄土の法門をみるは、」往生の得分を見うしなふなり、其故ハ、極ふの」往生ハ、上は天親、龍樹をすゝめ、下ハ末世の凡夫、」十悪五逆の罪人まてすゝめ給へり、しかるを、我」身ハ寂下の罪人にて、善人をすゝめ給へる文を」見て、卑下の心ををこして、往生を不定におもひ」て、順次の往生を得さる也、しかれハ、善人をすゝめ」給へるところをハ善人の分と見、悪人をすゝめ」たまへるところをハ我分とミて、得分にする也、」かくのことく見さためぬれハ、決定往生の信心」かたまりて、本願に乗して順次の往生をとく」るなり、」

又云、念佛申にハ、またく別の様なし、たゝ申せは」極ふへむまるとしりて、心をいたして申ハまいる也、」又云、南無阿弥陀仏といふハ、別したる事にハ思へから」す、阿弥陀ほとけ、我をたすけ給へといふことハと」心えて、心にハあミたほとけたすけ給へとおもひ」て、口には南無阿弥陁仏と唱るを、三心具足の名」号と申也、」

又云、罪ハ、十悪五逆のもの、なをむまると信して、」小罪をもをかさしと思へし、罪人なをむまる、い」かにいはんや善人をや、行ハ一念十念むなし」からすと信して、無間に修すへし、一念なをむまる、」いかにいはんや多念をや、」

又云、一念十念に往生をすといへハとて、念仏を疎」想に申すハ、信か行をさまたくるなり、念ゝ」不捨者といへハとて、一念を不定におもふハ、行か」信をさまたくるなり、信をハ一念にむまると信」し、行をハ一形にはけむへし、又一念を不定」におもふは、念ゝの念佛ことに不信の念仏に」なる也、其故ハ、阿ミた仏ハ、一念に一度の往生を」あてをき給へる願なれハ、念ことに往生の業」となるなり、」

又云、煩悩のうすくあつきをもかへりミす、罪障」のかろきをもきをも沙汰せす、たゝ口に南無阿弥」陀仏と唱て、聲につきて決定往生のおもひをな」すへし、」

又云、縦余事をいとなんとも、念仏を申し〳〵、これ」をするおもひをなせ、余事をしゝ念仏すとは」思へからす、」

又云、往生をねかひ、極楽にまいらん事をまめ」やかに思入たる人の気色ハ、世の中をひとく」ねり、恨たる色にて常にはある也、」

又云、人の命ハ、食事の时、むせて死する事も」あるなり、南無阿ミた仏とかミて、南無阿ミ陀仏と」のミ入へきなり、」

又云、法尓の道理といふ事あり、ほのをハそらに」のほり、水ハくたりさまになかる、菓子のなか」に、すき物あり、あまき物あり、これらハみな」法尓の道理なり、阿弥陀仏の本願ハ、名号をもて」罪悪の衆生をみちひかん、とちかひ給たれハ、」たゝ一向に念仏たにも申せハ、仏の来迎ハ法尓」の道理にてうたかひなし、」

又云、善導の尺を拝見するに、源空か目にハ、三心も」南無阿弥陀佛、五念も南無阿弥陁仏、四修も南無」阿弥陁仏なり、」

又云、弘願といへるハ、如大経説、一切善悪ん夫得生者、」莫不皆乗阿弥陀仏大願業力、為増上縁、と善導」釋し給へり、予かことき の不堪の身ハ、ひとへに」たゝ弘願をたのむなり、」

又云、我ハこれ、烏帽子もきさる男也、十悪の法然房、」愚痴の法然房か、念仏して往生せん、といふなり、」

又云、学生骨になりて、念仏やうしなはんすらむ、」

又云、本願の念仏にハ、ひとりたちをせさせて、すけ」をさゝぬなり、すけといふハ、智恵をもすけにさ」し、持戒をもすけにさし、道心をもすけに」さし、慈悲をもすけにさす也、善人ハ善人なから」念仏し、悪人ハ悪人なから念仏して、たゝむま」れつきのまゝにて念仏する人を、念仏に」すけさゝぬとハいふなり、さりなから、悪をあ

ら」ため、善人となりて念仏せん人ハ、仏の御心に」叶へし、かなはぬ物ゆへに、とあらんかゝらんと思」ひて、決定心おこらぬ人ハ、往生不定の人なるへし、」

又云、仏告阿難、汝好持是語、持是語者、即是持無」量壽仏名といへり、名号をきくといふとも、信せすハ」きかさるかことし、たとひ信すといふとも、となへすハ」信せさるかことし、たゝつねに念仏すへきなり、」

又云、近來の行人、觀法をなす事なかれ、仏像を觀」すとも、運慶、康慶かつくりたる仏ほとたにも、」觀しあらハすへからす、極楽の荘嚴を觀す」とも、桜、梅、桃李の華菓ほとも、觀しあら」ハさん事かたかるへし、たゝ彼仏今現在世成佛、」當知本誓重願不虚、衆生稱念必得往生の尺を」信して、ふかく本願をたのミて一向に名号を」唱へし、名号をとなふれハ、三心をのつから具足」するなり、」

又云、往生の業成就は、臨終平生にわたるへし、」本願の文簡別せさるゆへなり、恵心の心も、平生」にわたるとみえたり、」

又云、他力本願に乗するに二あり、乗せさるに」二あり、乗せさるに二といふハ、一にハ罪をつくる时」乗せす、其故ハかくのことく罪をつくれハ、念仏申」とも、往生不定なりとおもふ时に乗せす、二には」道心のおこる时乗せす、其故ハ、おなしく念仏申」とも、かくのことく道心ありて申さんする念仏」にてこそ往生ハせんすれ、無

道心にてハ念仏すと」もかなふへからす、と道心をさきとして、本願を」つきにおもふ時乗せさるなり、次に本願に乗」するに二の様といふハ、一には罪つくる時乗するなり、」其故ハ、かくのことく罪をつくれハ、決定して地獄」におつへし、しかるに本願の名号をとなふれハ、」決定往生せん事のうれしさよ、とよろこふ時に」乗する也、二には、道心おこる時乗するなり、其故ハ、」この道心にて往生すへからす、これ程の道心は、」無始よりこのかたおこれとも、いまた生死をはなれ」す、故に道心の有無を論せす、造罪の軽重をいは」す、たゝ本願の稱名を、念〻相續せんちからに」よりてそ、往生ハ遂へきとおもふ時に、他力本願に」乗するなり、」

又云、せこにこめたる鹿も、ともに目をかけすして」人かけにかへらす、むかひたる方へ、おもひきりて」まひらにゝくれハ、いくへ人あれとも、かならすに」けらるゝなり、その定に他力をふかく信して、」万事をしらす、往生をとけんと思へき也、」

又云、稱名のときに心に思へきやうハ、人の膝なとをひき」はたらかして、や、たすけ給へといふ定なるへし、」

又云、七日七夜心無間といふハ、明日の大事をかゝしと、」今日はけむかことくすへし、」

又云、人の手より物をゑんするに、すてに得たらん」と、いまた得さるといつれか勝

へき、源空ハ、すてに得た」る心地にて念仏ハ申なり、」
又云、往生ハ、一定と思へハ一定なり、不定とおもへハ」不定なり、」
又云、念仏申さんもの十人あらんに、たとひ九人は」臨終あしくて往生せすとも、われ一人ハ決定し」て往生すへしとおもふへし、」
又云、一丈のほりをこえんと思はん人ハ、一丈五尺を」こゑんとはけむへし、往生を期せん人ハ決定の」信をとりてあひはけむへきなり、」
また云、いけらハ念仏の功つもり、しなは浄土へ」まいりなん、とてもかくてもこの身にハ、おもひ」わつらふ事そなき、と思ぬれハ、死生ともに」わつらひなし、」
あるとき上人、あはれ、このたひしおほせはや、」なと仰られけるを、乗願房うけ給て、上人た」にも、かやうに不定けなるおほせの候はんにハ、」その餘の人ハいかゝし候へき、と申けれハ、上人うち」わつらひたまひて、まさしく蓮臺にのらんま」てハ、いかてかこのおもひハたえ候へき、とその」たまひける、」
或人、上人の申させたまふ御念仏ハ、念ゝこと」に仏の御こゝろにかなひ候らん、なと申けるを、い」かなれハ、と上人かへしとはれけれハ、智者にて」をはしませハ、名号の功徳をもくはしくし」ろしめし、本願のやうをもあきらかに御心得あ」るゆへにと申けるとき、汝本願を信する事」またしかりけり、弥陀如来の本願の名号ハ、

木」こり、草かり、なつみ、水くむたくひことときのもの」の、内外ともにかけて一文不通なるか、となふれハ」かならすむまると信して、真実にねかひて、常に」念仏申を寂上の機とす、もし智恵をもちて」生死をはなるへくハ、源空いかてかかの聖道門を」すてゝ、この浄土門に趣へきや、聖道門の修行」ハ、智恵をきハめて生死をはなれ、浄土門の修行」は、愚癡にかへりて、極樂にむまるとしるへし、とそ」おほせられける、」

又人〳〵後世の事申けるついてに、往生ハ魚食」せぬものこそすれ、といふ人あり、あるひハ、魚食」するものこそすれ、といふ人あり、とかく論し」けるを、上人きゝたまひて、魚くふもの往生を」せんにハ、鵜そせむする、魚くはぬものせんにハ、猿そせんする、くふにもよらす、くはぬにも」よらす、たゝ念仏申もの往生ハするとそ、」源空ハしりたる、とそ仰られける、」

上人御往生の後、三井寺の住心房の夢のうち」にとはれても、念仏ハまたく風情もなし、」たゝ申よりほかの事なしと、上人荅給ける、」

釈文

上人（しょうにん）、常（つね）に仰（おお）せられける御詞（おことば）。

上人宣わく、「口伝無くして浄土の法門を見るは、往生の得分を見失うなり。

順次の往生

その故は、極楽の往生は、上は天親・龍樹を勧め、下は末世の凡夫、十悪五逆の罪人まで勧め給えり。しかるを、我が身は最下の罪人にて、善人を勧め給える文を見て、卑下の心を起こして、往生を不定に思いて、順次の往生を得ざるなり。しかれば、善人を勧め給えるところをば善人の分と見、悪人を勧め給えるところをば我が分と見て、得分にするなり。かくのごとく見定めぬれば、決定往生の信心固まりて、本願に乗じて順次の往生を遂ぐるなり。」

念仏申すには別の様なし

また云く、「念仏申すには、全く別の様無し。ただ申せば極楽へ生まると知りて、心を致して申せば参るなり。」

また云く、「南無阿弥陀仏というは、別したることには思うべからず。阿弥陀ほとけ、我を助け給えという言葉と心得て、心には阿弥陀仏助け給えと思いて、口には南無阿弥陀仏と唱うるを、三心具足の名号と申すなり。」

三心具足の名号

また云く、「罪は十悪五逆の者、なお生まると信じて小罪をも犯さじと思うべし。罪人なお生まる、いかにいわんや善人をや。行は一念十念空しからずと信じて、無間に修すべし。一念なお生まる、いかにいわんや多念をや。」

罪人なお生る

また云く、「一念十念に往生をすといえばとて、念仏を疎想に申すは、信が行を

信をば一念に生まると信じ、行をば一形にはげむべし

煩悩も顧みず

余事

忠実やか

食事

法爾の道理

妨ぐるなり。念々不捨者といえばとて、一念を不定に思うは、行が信を妨ぐるなり。信をば一念に生まると信じ、行をば一形に励むべし。また一念を不定に思うは、念々の念仏ごとに不信の念仏になるなり。その故は、阿弥陀仏は、一念に一度の往生を当て置き給える願なれば、念ごとに往生の業となるなり。」

また云く、「煩悩の薄く厚きをも顧みず、罪障の軽き重きをも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と唱えて、声につきて決定往生の思いをなすべし。」

また云く、「たとい余事を営むとも、念仏を申し申し、これをする思いをなせ。余事をしし念仏すとは思うべからず。」

また云く、「往生を願い、極楽に参らんことを、忠実やかに思い入りたる人の気色は、世の中を一曲り、恨みたる色にて常には有るなり。」

また云く、「人の命は、食事の時、咽せて死することも有るなり。南無阿弥陀仏と嚙みて、南無阿弥陀仏と呑み入るべきなり。」

また云く、「法爾の道理ということ有り。炎は空に上り、水は下りさまに流る。菓子の中に、酢き物有り、甘き物有り。これらは皆、法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪悪の衆生を導かん、と誓い給いたれば、ただ一向に念仏だにも申せば、仏の来迎は法爾の道理にて疑い無し。」

三心・五念・四修

また云く、「善導の釈を拝見するに、源空が目には、三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なり。」

弘願

また云く、「弘願といえるは、『大経』に説くがごとく、一切善悪の凡夫の生まることを得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて、増上縁と為さざるは莫し、と善導釈し給えり。予がごときの不堪の身は、ひとえにただ弘願を憑むなり。」

烏帽子も着ざる男

また云く、「我はこれ、烏帽子も着ざる男なり。十悪の法然房、愚痴の法然房が、念仏して往生せんと言うなり。」

学生

また云く、「学生骨になりて、念仏や失わんずらむ。」

助差さぬ念仏

また云く、「本願の念仏には、独り立ちをさせて、助を差さぬなり。助というは、智恵をも助に差し、持戒をも助に差し、道心をも助に差し、慈悲をも助に差すなり。善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただ生まれ付きのままにて念仏する人を、念仏に助差さぬとは言うなり。さりながら、悪を改め、善人と成りて念仏せん人は、仏の御心に叶うべし、叶わぬ物故に、とあらんかからんと思いて、決定心起こらぬ人は、往生不定の人なるべし。」

汝好持是語

また云く、「仏、阿難に告げたまわく、汝、好く是の語を持て。是の語を持てとは、すなわちこれ無量寿仏の名を持てとなりと言えり。名号を聞くというとも、

信ぜずば聞かざるがごとし。たとい信ずというとも、唱えずば信ぜざるがごとし。ただ常に念仏すべきなり。」

観法をなすことなかれ

また云く、「近来の行人、観法をなすことなかれ。仏像を観ずとも、運慶・康慶が造りたる仏ほどだにも、観じ現すべからず。極楽の荘厳を観ずとも、桜・梅・桃・李の華菓ほども、観じ現さんこと難かるべし。ただ彼の仏、今現に世に在して成仏したまえり。当に知るべし、本誓の重願虚しからざることを。衆生称念すれば必ず往生を得、の釈を信じて、深く本願を憑みて一向に名号を唱うべし。名号を唱うれば、三心自から具足するなり。」

臨終平生

また云く、「往生の業成就は、臨終平生に渡るべし。本願の文簡別せざる故なり。恵心の心も、平生に渡ると見えたり。」

他力本願に乗ずるに二つあり

また云く、「他力本願に乗ずるに二有り。乗ぜざるに二有り。乗ぜざるに二というは、一には罪を造る時乗ぜず。その故は、かくのごとく罪を造れば、念仏申すとも、往生不定なりと思う時に乗ぜず。二には道心の起こる時乗ぜず。その故は、同じく念仏申すとも、かくのごとく道心有りて申さんずる念仏にてこそ往生はせんずれ、無道心にては念仏すとも叶うべからず、と道心を先として、本願を次に思う時乗ぜざるなり。次に本願に乗ずるに二の様というは、一には罪造る

時乗ずるなり。その故は、かくのごとく罪を造れば、決定して地獄に落つべし。しかるに、本願の名号を唱うれば、決定往生せんことの嬉しさよ、と喜ぶ時に乗ずるなり。二には、道心起こる時乗ずるなり。その故は、この道心にて往生すべからず、これほどの道心は無始よりこの方起これども、、いまだ生死を離れず。故に道心の有無を論ぜず、造罪の軽重をいわず、ただ本願の称名を念々相続せん力によりてぞ、往生は遂ぐべきと思う時に、他力本願に乗ずるなり。」

勢子に籠めたる鹿

また云く、「勢子に籠めたる鹿も、ともに目をかけずして人影に帰らず、向かいたる方へ、思い切りて真平に逃ぐれば、幾重人有れども、必ず逃げらるるなり。その定に他力を深く信じて、万事を知らず、往生を遂げんと思うべきなり。」

称名の時に思う様

また云く、「称名の時に心に思うべき様は、人の膝などを引き働かして、や、助け給え、という定なるべし。」

七日七夜心無間

また云く、「七日七夜心無間というは、明日の大事を欠かじと、今日励むがごとく為べし」

すでに得たる心地

また云く、「人の手より物を得んずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざると何れか勝るべき。源空は、すでに得たる心地にて念仏は申すなり。」

一定不定

また云く、「往生は、一定と思えば一定なり。不定と思えば不定なり。」

我れ一人往生すべし
一丈の堀を一丈五尺を越えと励むべし
生けらば念仏の功積もり
不定気なる仰せ

最上の機

また云く、「念仏申さん者十人有らんに、たとい九人は臨終悪しくて往生せずとも、我一人は決定して往生すべしと思うべし。」

また云く、「一丈の堀を越えんと思わん人は、一丈五尺を越えんと励むべし。往生を期せん人は、決定の信を取りて相励むべきなり。」

また云く、「生けらば念仏の功積もり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくても、この身には思い煩うことぞ無きと思いぬれば、死生ともに煩い無し。」

ある時上人、「哀れ、この度しおおせばや」など仰せられけるを、乗願房承りて、「上人だにも、かように不定気なる仰せの候わんには、その余の人はいかがし候べき」と、申しければ、上人うち煩い給いて、「正しく蓮台に乗らんまでは、いかでかこの思いは絶え候べき」とぞ宣いける。

ある人、「上人の申させ給う御念仏は、念々ごとに仏の御心に叶い候らん」など申しけるを、「いかんなれば」と、上人返し問われければ、「智者にておわしませば、名号の功徳をも詳しく知ろしめし、本願の様をも明らかに御心得有る故に」と申しける時、「汝、本願を信ずること、まだしかりけり。弥陀如来の本願の名号は、樵り、草刈り、菜摘み、水汲む類ごときの者の、内外ともにかけて、一文不通なるが、唱うれば必ず生まると信じて、真実に願いて、常に念仏申

すを、最上の機とす。もし、智恵をもちて生死を離るべくば、源空いかでか彼の聖道門を捨てて、この浄土門に赴くべきや。聖道門の修行は、智恵を極めて生死を離れ、浄土門の修行は、愚痴に帰りて、極楽に生まると知るべし」とぞ仰せられける。

魚食、非魚食によらず、念仏申すものこそ往生

また人々後世のこと申しけるついでに、「往生は魚食せぬ者こそすれ」と言う人有り。あるいは、「魚食する者こそすれ」と言う人有り。とかく論じけるを、上人聞き給いて、「魚食う者往生をせんには、鵜ぞせむずる。魚食わぬ者せんには、猿ぞせんずる。食うにもよらず、食わぬにもよらず、ただ念仏申す者往生はするとぞ、源空は知りたる」とぞ仰せられける。

念仏は風情もなし

上人御往生の後、三井寺の住心房の夢の中に問われても、「念仏は全く風情も無し、ただ申すより外のこと無し」と、上人答え給いける。

〔第二段〕　詞書

又一紙にのせての給ハく、末代の衆生を、往生極楽の機にあてゝみるに、行すくなしとて」も疑へからす、一念十念に足ぬへし、罪人なり」とても疑へからす、罪根ふかきをもきらは」しとの給へり、時くたれりとても疑へからす、」法滅以後の衆生、

猶もて往生すへし、況近来」をや、我身わろしとても疑へからす、自身ハ是」煩悩具足せる凡夫なり、との給へり、十方に」浄土おほけれと、西方を願ハ、十悪五逆の衆」生の生る故也、諸佛のなかに弥陀に歸し」たてまつるハ、三念五念にいたるまて、みつか」ら来迎し給故也、諸行のなかに念佛を用るハ、」彼の佛の本願なる故也、いま弥陁の本願に」乗して往生しなむに、願として成せすといふ」事あるへからす、本願に乗する事ハ、信心のふ」かきによるへし、受かたき人身をうけて、あひ」かたき本願にあひて、おこしかたき道心」を發して、離かたき輪廻の里をハなれて、生」かたき浄土に往生せむ事、悦の中のよろ」こひなり、罪ハ十悪五逆の者も生すと信して、」少罪をも犯せしと思へし、罪人猶生る、況善人乎、」行ハ一念十念猶むなしからすと信して、無間ニ」修すへし、一念猶生る、況多念哉、阿弥陁佛ハ」不取正覺の言を成就して、現に彼國にませは、」定て命終の时ハ来迎し給ハん、尺尊ハ善哉、我」教にしたかひて、生死を離と知見し給ひ、六方」の諸仏ハ悦哉、我證誠を信して、不退の浄土に」生と悦給覧、天に仰地に卧して悦へし、このたひ」弥陁の本願にあふ事を、行住坐卧にも報す」へし、かの佛の恩徳を、憑てもたのむへき」ハ乃至十念の詞、信しても猶信すへきハ、必得往」生の文也と、此書世間に流布す、上人の小消息と」いへるこれなり、」

一紙小消息

一念十念に足りぬべし

罪人なお生る、況や善人をや

釈文

また一紙に載せて宣わく、「末代の衆生を、往生極楽の機に当ててみるに、行少なしとても疑うべからず、一念十念に足りぬべし。罪人なりとても疑うべからず、罪根深きをも嫌わじ、と宣えり。時下れりとても疑うべからず。法滅以後の衆生、なおもて往生すべし、いわんや近来をや。我が身悪しとても、疑うべからず、自身はこれ、煩悩具足せる凡夫なり、と宣えり。十方に浄土多けれど、西方を願うは、十悪五逆の衆生の生まる故なり。諸仏の中に弥陀に帰し奉るは、三念五念に至るまで、自ら来迎し給う故なり。諸行の中に念仏を用うるは、彼の仏の本願なる故なり。今弥陀の本願に乗じて往生しなむに、願として成ぜずということ有るべからず。本願に乗ずることは、信心の深きによるべし。受け難き人身を受けて、会い難き本願に会いて、発し難き道心を発して、離れ難き輪廻の里を離れて、生まれ難き浄土に往生せむこと、悦びの中の悦びなり。罪は十悪五逆の者も生ずと信じて、少罪をも犯せじと思うべし。罪人なお生まる、況や善人をや。行は一念十念なお虚しからずと信じて、無間に修すべし。一念なお生まる、いわんや多念をや。阿弥陀仏は不取正覚の言を成就して、現に彼の国に

在せば、定んで命終の時は来迎し給わん。釈尊は善きかな、我が教に従いて生死を離ると知見し給い、六方の諸仏は悦ばしきかな、我が証誠を信じて不退の浄土に生まると悦び給うらん。天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、この度弥陀の本願に会うことを。行住坐臥にも報ずべし、彼の仏の恩徳を。憑みても憑むべきは乃至十念の詞、信じてもなお信ずべきは、必得往生の文なり」と。この書世間に流布す。上人の小消息といえるこれなり。

〔第三段〕　詞書

上人、念仏の行者の心得へき樣をおしへ給へる事」あり、所謂われハ阿ミたをこそたのみたれ、念佛」をこそ信したれとて、諸佛菩薩の悲願をかろ」しめたてまつり、法華、般若ハの目出たき經とも」を、わろくおもひそしる事ゆめ〳〵あるへからす、阿」弥陁仏を信したれハとて、よろつの佛をそしり、」もろ〳〵の聖教をうたかひそしりたらんするハ、信心」のひかみたるにてあるへき也、信心たゝしからすハ、阿」ミた佛の御心に叶ましけれハ、念佛すとも、弥陁の」悲願にもれん事ハ一定也、又罪をつくらしとつゝ」しみてよからんとするハ、弥陁の本願をかろしむる」にてこそあれ、又念佛を多く申さんとて、日ゝ」に数遍のかすをつむハ、他力をうたかふにてこ

そあ」れ、なといふ事の多くきこゆる、かやうのひか事、」ゆめ〳〵もちゐるへからす、いつれのところにか、阿弥」陁佛ハ罪つくれとすゝめ給たる、これひとへにわか」身に悪をもとゝめえす、罪をのみつくりゐたるまゝ」に、かゝるゆくちもなき虚言をたくみいたして、も」のもしらぬ男女の輩をすかしほらかして、罪業」をすゝめ、煩悩をおこさしむる事、しかしなから」これ天魔のたくひ也、外道のしわさ也、往生極楽の」あたかたき也と思へし、又念佛の数を多く申も」のをハ、自力をはけむといふ事、これ又ものも覚へ」す、浅猿しき僻事也、たゝ一念二念をとなふとも、」自力の心ならん人ハ、自力の念佛とすへし、千遍万遍」をとなへ、百日千日、よるひるはけみつとむとも、ひと」へに願力をたのみ、他力をあふきたらん人の念佛ハ、聲」聲念〻、しかしながら他力の念佛にてあるへし、され」ハ三心をおこしたる人の念佛ハ、日〻夜〻、时〻刻〻」に唱れとも、しかしなから願力をあふき、他力をたの」ミたる心にて唱居たれハ、かけてもふれても、自力」の念佛とハいふへからす、又三心と申事ハ、その子細をし」りたる人の念佛に、三心具足せん事ハ左右に及ハす、」つや〳〵三心の名をたにもしらぬ、無智の輩の念佛」にハ、いかてか三心具し候へき、と申す人も候やらん、これ」ハ返〻ひか事にて候也、たとひ三心の名をたにも」しらぬ無智の者なれとも、弥陁のちかひをたのみた」てまつりて、すこしもうたかふ心なく

して、この名号」を唱れハ、この心か即三心具足の心にてあるなり、」されハ、只ひらに信してたにも念佛すれハ、三心ハをのつか」ら具する也、されはこそ、よに浅猿しき一文不通の」輩のなかにも、一すちに念佛するものハ、臨終正念に」して、目出き往生をハすれ、これ現證あらたなる事」也、露ちりも疑へからす、中〳〵よくもしらぬ三心沙汰」して、あしさまに心得たる人〳〵ハ、臨終も思やう」ならぬ事おほし、それにて誰〳〵も心得へき也、」又とき〳〵別時の念佛を修して、心をも身をも」はけまし、とゝのへすゝむへき也、日ゝに六万遍、七」万遍を唱へハ、さても足りぬへき事にてあれと」も、人の心さまハ、いたく目なれ耳なれぬれハ、いら〳〵」とすゝむ心すくなく、あけくれハ怱ゝとして心閑」ならぬ様にてのみ、疎略になりゆく也、その心を」すゝめんためには、とき〳〵別時の念佛を修すへき」也、しかれハ、善導和尚もねんころにはけまし、恵」心の先徳もくハしくをしへられたり、道場をも」ひきつくろひ、花香をも備たてまつらん事、たゝ」ちからのたへたらんにしたかふへし、又我身をも、こ」とにきよめて道場に入て、或ハ三时、或ハ六时なんと」に念佛すへし、もし同行なんとあまたあらん时ハ、」かはる〳〵いりて不断念佛にも修すへし、かやうの」事ハ、おの〳〵やうにしたかひてハからふへし、善導」和尚ハ、月の一日より八日にいたるまて、或ハ八日より」十五日にいたるまて、或ハ十五日より廿三日

にいたる」まで、或ハ廿三日より晦日にいたるまで、と仰られ」たり、面ゝ指合さらん時をハからひて、七日の別时」を常に修すへし、ゆめ〳〵すゝろ事ともをいふも」のにすかされて、不善の心あるへからす、又いかにも〳〵、」臨終正念に安住して、目にハ阿みたほとけをおか」み、口にハ弥陁の名号をとなへ、心にハ聖衆の來迎」を待たてまつるへし、としころ日ころいみしく念仏」の功を積たりとも、臨終に悪縁にもあひ、寐後に」あしき心もおこりて、念佛の心行をも退しぬる」ものならハ、順次の往生しはつして、一生二生な」りとも、三生四生なりとも、生死のなかれにしたかひて、」出離の道にとゝこほらん事ハ、まめやかに心う」く口惜き事そかし、されハ善導和尚の御すゝ」めにハ、願弟子不臨命終时　心不顚倒　心不錯乱」心不失念　身心無諸苦痛　身心快楽　如入禅定」聖衆現前　乘佛本願　上品往生　阿弥陀佛國と」ねんころに發願せよとの給へり、いよ〳〵臨終の」正念をハいのりもし、ねかふへき事也、臨終の」正念をいのるハ、弥陀の本願をたのまぬものそなん」と申人ハ、善導にハいかほとまさりたる學生そ」と思へし、あなあさまし、おそろし〳〵、又念佛ハ」常におこたらぬか、一定往生する事にてある」也、善導すゝめての給ハく、一發心已後、誓畢此生」無有退轉、唯以浄土為期、又云、一心專念弥陁名号」行住坐卧、不問时節久近、念々不捨者、是名」正定之業、順彼佛願故文といへり、かやうにすゝめ」ま

し〳〵たる事ハあまた多けれとも、こと〳〵く」にかきのせかたし、凞へし、仰へし、ふかく信へし、」更に疑事なかれ、又まことしく念佛を行」して、けに〳〵しき念佛者になりぬれハ、よろ」つの人を見るに、ミなわか心にハおとりて、淺猿」しくわろけれハ、我身のよきまゝに、我ハゆゝし」き念佛者にてあるものかな、誰〳〵にも勝たり」と思也、この心をハよく〳〵つゝしむへき事也、世」もひろう、人も多けれハ、山のをく、林のなかにこ」もりゐて、人にもしられぬ念佛者の、貴く目出」き、さすかに多くあるを、わかきかすしらぬにて」こそあれ、されハわれほとの念佛者、よもあらし」とおもふ僻事也、この思ハ大憍慢にてあれハ、即」三心もかくる也、又それをたよりとして、魔縁の」きたりて往生を妨くる也、これ我身のいみし」くて、罪業をも滅し、極楽へもまいる事ならハ」こそあらめ、ひとへに阿ミた仏の願力にて煩悩を」ものそき、罪業をもけして、かたしけなく手つ」から身つから極樂へむかへとりて、歸らせまし」す事也、我ちからにて往生する事ならハこそ、」われかしこしといふ慢心をハおこさめ、憍慢の心」たにもおこりぬれハ、心行かならすあやまる故に、」たちところに阿弥陀ほとけの願にそむきぬ」るものにて、弥陀も諸佛も護念し給ハす、さる」まゝにハ悪鬼のためにもなやまさるゝ也、返〻」もつゝしみて、憍慢の心をおこすへからす、あな」かしこ〳〵と、ねんころにをしへをき給へり、ふか」

く上人教誡の詞を信して、敢て本願にほ」こるおもひなく、往生の前途を遂へきもの也、」

法然上人、念仏行者の心得べき様を説く

釈文

上人、念仏の行者の心得べき様を教え給えること有り。いわゆる「我は阿弥陀をこそ憑みたれ、念仏をこそ信じたれとて、諸仏菩薩の悲願を軽しめ奉り、『法華』『般若』等の目出たき経どもを、悪く思い、謗ることゆめゆめ有るべからず。阿弥陀仏を信じたればとて、万の仏を謗り、諸々の聖教を疑い謗りたらんずるは、信心の僻みたるにて有るべきなり。信心正しからずば、阿弥陀仏の御心に叶うまじければ、念仏すとも弥陀の悲願に漏れん事は一定なり。また、罪を造らじと慎みて善からんとするは、弥陀の本願を軽しむるにてこそあれ。また念仏を多く申さんとて、日々に数遍の数を積むは、他力を疑うにてこそあれ等言うことの多く聞こゆる。かようの僻事、ゆめゆめ用いるべからず。何れのところにか、阿弥陀仏は罪造れと勧め給いたる。これひとえに我が身に悪をも止め得ず、罪をのみ造りいたるままに、かかる行路も無き虚言を巧み出して、物も知らぬ男女の輩を賺しほらかして、罪業を勧め、煩悩を起こさしむること、しかしながら、

信心の僻み

自力の念仏・他力の念仏

三心具足の心

これ天魔の類なり、外道のしわざなり。往生極楽の仇敵なりと思うべし。また、念仏の数を多く申す者をば、自力を励むということ、これまた物も覚えず、浅ましき僻事なり。ただ一念二念を唱うとも、自力の心ならん人は自力の念仏とすべし。千遍万遍を唱え、百日千日、夜昼励み勤むとも、ひとえに願力を憑み、他力を仰ぎたらん人の念仏は、声々念々、しかしながら他力の念仏にて有るべし。されば、三心を起こしたる人の念仏は、日々夜々、時々刻々に唱うれども、しかしながら願力を仰ぎ他力を憑みたる心にて唱えいたれば、掛けても触れても、自力の念仏とは言うべからず。また三心と申すことは、その子細を知りたる人の念仏に、三心具足せんことは左右に及ばず。つやつや三心の名をだにも知らぬ、無智の輩の念仏には、いかでか三心具し候べき、と申す人も候やらん。これは、返す返す僻事にて候なり。たとい三心の名をだにも知らぬ無智の者なれども、弥陀の誓を憑み奉りて、少しも疑う心無くして、この名号を唱うれば、この心がすなわち三心具足の心にてあるなり。されば、ただ平に信じてだにも念仏すれば、三心は自から具するなり。さればこそ、世に浅ましき一文不通の輩の中にも、一筋に念仏する者は、臨終正念にして、目出度き往生をばすれ。これ現証灼なることなり。露塵も疑うべからず。なかなか良くも知らぬ三心沙汰して、

別時の念仏

悪し態に心得たる人々は、臨終も思う様ならぬこと多し。それにて誰々も心得べきなり。また、時々別時の念仏を修して、心をも身をも励まし、整え勧むべきなり。日々に六万遍、七万遍を唱えば、さても足りぬべきことにてあれども、人の心様は、甚く目慣れ耳慣れぬれば、苛々と勧む心少なく、明け暮れは怠々として心閑かならぬ様にてのみ、疎略に成り行くなり。その心を勧めんためには、時々別時の念仏を修すべきなり。しかれば、善導和尚も懇ろに励まし、恵心の先徳も詳しく教えられたり。道場をも引き繕い、花香をも備え奉らんこと、ただ力の絶えたらんに従うべし。また、我が身をも殊に浄めて道場に入りて、あるいは三時、あるいは六時なんどに念仏すべし。もし同行なんどあまた有らん時は、わる替わる入りて不断念仏にも修すべし。かようのことは、おのおの様に従いて計らうべし。善導和尚は、「月の一日より八日に至るまで、あるいは八日より十五日に至るまで、あるいは十五日より二十三日に至るまで、あるいは二十三日より晦日に至るまで」と仰せられたり。面々指し合わざらん時を計らいて、七日の別時を常に修すべし。ゆめゆめ漫ろことどもを言う者に賺されて、不善の心有るべからず。またいかにもいかにも臨終正念に安住して、目には阿弥陀仏を拝み、口には弥陀の名号を唱え、心には聖衆の来迎を待ち奉るべし。年頃日

七日の別時

発願文

散善義

頃、いみじく念仏の功を積みたりとも、臨終に悪縁にも遭い、最後に悪しき心も起こりて、念仏の心行をも退しぬる者ならば、順次の往生し外して、一生二生なりとも、三生四生なりとも、生死の流れに従いて出離の道に滞らんことは、忠実やかに心憂く、口惜しきことぞかし。されば善導和尚の御勧めには、願わくば弟子等、命終の時に臨んで、心顚倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心に諸の苦痛無く、身心快楽にして禅定に入るがごとく、聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ、と懇ろに発願せよと宣えり。いよいよ臨終の正念をば祈りもし、願うべきことなり。臨終の正念を祈るは、弥陀の本願を憑まぬものぞ等申す人は、善導にはいかほど勝りたる学生ぞと思うべし。あな浅まし、恐ろし恐ろし。また念仏は常に怠らぬが、一定往生することにてあるなり。善導勧めて宣わく、一たび発心して已後、誓いてこの生を畢るまで、退転有ること無く、ただ浄土をもって期となせ。また云く、一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる者、是れを正定の業と名付く、彼の仏の願に順ずるが故に（文）と言えり。かように勧めましましたることは、あまた多けれども、ことごとくに書き載せ難し。憑むべし、仰ぐべし、深く信ずべし。さらに疑うことなかれ。また誠

しく念仏を行じて、実に実にしき念仏者になりぬれば、万の人を見るに、皆我が心には劣りて、浅ましく悪ければ、我が身の良きままに、我は由々しき念仏者にてある者かな、誰々にも勝れたりと思うなり。この心をば良く良く慎むべきことなり。世も広う人も多ければ、山の奥、林の中に籠りいて、人にも知られぬ念仏者の、貴く目出き、さすがに多く有るを、我が聞かず知らぬにてこそあれ。されば、我ほどの念仏者、よも有らじと思う、僻事なり。この思いは大驕慢にてあれば、すなわち三心も欠くるなり。またそれを頼りとして、魔縁の来りて往生を妨ぐるなり。これ我が身のいみじくて、罪業をも滅し、極楽へも参ることならばこそあらめ、ひとえに阿弥陀仏の願力にて、煩悩をも除き、罪業をも消して、忝く手づから自ら、極楽へ迎え取りて帰らせましますことなり。我が力にて往生することならばこそ、我賢しという慢心をば起こさめ。驕慢の心だにも起こりぬれば、心行必ず誤る故に、立ちどころに阿弥陀ほとけの願に背きぬる者にて、弥陀も諸仏も護念し給わず。さるままには悪鬼のためにも悩まさるるなり。返す返すも慎みて、驕慢の心を起こすべからず。あなかしこ、あなかしこ」と、懇ろに教え置き給えり。深く上人教誡の詞を信じて、敢えて本願に誇る思い無く、往生の前途を遂ぐべきものなり。

〔奥書〕

廿一巻析𥿄数廿二丁

四十八巻繪傳　知恩院
常住

第二十二巻

〔第一段〕　詞書

或人不注名字、上人の勧化に帰してのち、安心起行の」やう、こまかにたつね申けるにつきて、しるし」つかハされける状云、御返事こまかにうけたまはり候ぬ、」かやうに申事の一分御さとりをそへ、往生の御心」さしもよくなり候ぬへからむには、おそれをも」かへりミ候へき事にて候ハす、いくたひにても」申たくこそ候へ、まことにわか身のいやしく、わか」心のつたなきをかへりみす、たれ〳〵もみな人の弥陀」のちかひをたのミて、決定往生のみちにおもむかんと」こそおもふ事にて候へとも、人の心さま〳〵にて、たたひと」すちに、ゆめまほろしのうき世はかりのたのしミ、」さかへをのミもとめて、すへてのちの世をしらぬ人」も候、又のちをおそるへき事を思しりて、つとめ」おこなふ人につきても、かれこれに心をうつして、」ひとすちに一行をたのまぬ人も候、又いつれの」行にても、もとよりこゝろさしはしめ、おもひそめ」つるをは、いかなることハりをきけとも、もとの執心を」あらためぬ人も候、又今日ハいミしく信をおこし」て、一すちにおもひつきぬとみるほとに、のちには」う

ちすつる人も候、かくのミ候て、まことしく浄土の」一門にいりて、念佛の一行をもはらにする人もあり」かたく候事は、わか身ひとつのなけきとこそは」人しれす思候へとも、法によりて人によらぬ理を、」うしなハぬほとの人もありかたき世にて候にや、」おのつからす、めこ、ろミ候にも、われからあなつら」はしさに、申いつる事もすてむするにや、と思」しらる、事のミにて候事の、心うくかなしく」候て、このゆへハ、いまひときハとく浄土にむまれて、さと」りをひらきてのちに、いそきこの世界にかへり」きたりて、神通方便をもて、結縁の人をも無縁の」ものをも、讃をも謗をも、みなこと〳〵く念仏に」す、めいれて、浄土へむかへんと、ちかひをおこしてのミ」こそ、當时の心をもなくさむる事にて候に、この」おほせにそ、わか心さしもしるしある心地して、あまりに」うれしく候へは、その儀にて候ハ、、おなしくハまめ」やかに、けに〳〵しく御沙汰候て、ゆくすゑもあや」うからす、往生もたのもしきほとに、思食さためさせ」給へく候、詮しては、人のはからひ申へき事にて候」はす、よく〳〵案して御覧候へ、この事にすきたる」御大事、何事かハ候へき、この世の名聞利養ハ、なか〳〵」申ならふるにもいま〳〵しく候、やかて昨日今日」まなこにさいきり、耳にみちたるはかなさにて」候めれは、事あたらしく申たつるにも及候はす、」たゝ返、御心をしつめて、思食はからふへく候、さき」にハ聖道、浄土の

二門を心えわかちて、浄土一門に」いらせましますへきよしを申候き、いまは浄土」門につきて行すへきやうを申へし、浄土に往生」せむとおもはむ人は、安心起行と申て、心と行と」相應すへきなり、その心といふは、觀無量壽經に」ときて、もし衆生あて、わか國にむまれんとおもはん」ものは、三種の心をおこしてすなはち往生す、なに」をか三とする、一には至誠心、二には深心、三には廻向」發願心なり、三心を具せるものハ、かならすかの國に」生といへり、善導和尚この三心を釋していはく、ハしめに」至誠心、至といは真なり、誠といは實なり、一切衆生の」身口意業に、修するところの解行、かならす真實心の」なかになすへきことをあかさむとおもふ、ほかにハ」賢善精進の相を現し、うちに虚假をいたく事を」えされ、内外明闇をゑらハす、かならす真實をもち」ゐよ、かるかゆへに至誠心となつく、といへり、この釈の」心は、至誠心といは真實心なり、その真實といは身に」ふるまひ、口にいひ、心におもはむ事、みなまことの」心を具すへきなり、すなはちうちはむなしく、ほかを」かさる心なきをいふなり、このこゝろは、うき世をそ」むきて、まことのミちにおもむくとおほしき人〳〵」の中に、おほく用意すへき心はへにて候なり、われも」人も、いふはかりなきゆめの世を、執するこゝろの」ふかゝりしなこりにて、ほと〳〵につけて、名聞」利養わつかにふりすてたるはかりを、かたくいみし」き事にし

て、今世さまにも心のたけのうるさきに」とりなして、さとりあさき世間の人の心をハしらす、」たうとかりいミしかるを、これこそハ本意なれと」こゝろさしたる心にて、みやこのほとりをかきはなれ」て、かすかなる住所をたつぬるまても、心のしつまらん」ためをつきになして、本尊、道場の荘厳、まかき」のうちにはなのこたちなむとの、心ほそくもの」あはれならむ事からを、人にみえきかれん事を」のミ執するほとに、つゆの事も人のそしりにならん」事あらしと、おもひいとなむ心よりほかに、おもひ」ましふる事なし、かやうなるこゝろにのミなして、」仏のちかひをたのミ、往生をねかハんといふ事ハ、」思ひいれす、沙汰もせぬ事の、やかて至誠心かけて、」往生せぬこゝろはへにて候なり、又かく申候へは、」ひとへに今世の人目をハ、いかにてもありなむ、」人のそしりをかへりミぬかよきそと、申儀にてハ」候ハす、人目をかへりみる事ハ候へとも、それをのミ」おもひいれて、往生のさハりになるかたをハ、かへり」みぬやうにひきなされ候ハん事の、返ゝおろかに」くちをしく候へは、御身にあたりても、御心えさせ」まいらせんかために申候なり、この心につきて、」四句の不同あるへし、一には、外相ハたうとけにて、」内心ハ貴からぬあり、二には、外相も内心もともに」貴からぬ人あり、三には、外相はたうとけもなくて、」内心はたうとき人あり、四には、内外ともに貴とき」人あり、この四人かなかに、さきの二

人ハ、いまきらふ」ところの至誠心かけたる人なり、これを虚假の」人となつくへし、のちの二人ハ、至誠心具したる人」なり、これを真實の行者となつくへし、されは詮する」ところハ、たゝ内心にまことの心をおこして、外相」をはよくもあしくも、とてもかくてもあるへきかと、」おほえ候なり、おほかたこの世をいとはむ事も、」極樂をねかハん事も、人目はかりをおもはて、まこと」の心をおこすへきにて候也、これを至誠心と申なり、二に」深心といは、善導の釋にいはく、深心といは、すなはち」これふかく信する心なり、これに二種あり、一には」決定して、ふかくわか身ハ煩悩具足せる罪悪生死の」凡夫なり、善根薄少にして、曠劫よりこのかた、つねに」流轉して、出離の縁なしと信すへし、二には、ふかく」かの阿弥陀佛の四十八願をもて、衆生を摂取し給、」すなはち名号を稱する事、下十聲にいたるまて、」かの願に乗して、さためて往生する事をうと信して、」乃至一念もうたかふ事なきかゆへに、深心となつく、」又深心といふハ、決定して心をたてゝ、仏教にしたかひ」て修行して、なかく疑心をのそくなり、一切の」別解、別行、異學、吴見、吴執のために、退失傾動」せられされ、といへり、この釈の心は、はしめにハわか身」のほとを信し、のちには仏の願を信するなり、その」ゆへは、もしはしめの信心をあけすして、のちの信心を」釋し給ハゝ、もろ〳〵の往生をねかハん人、たとひ」本願の名号をハとなふとも、

みつから心に貪欲、」嗔恚煩悩をもおこし、身に十悪、破戒ゑの罪悪」をもつくりたる事あらハ、みたりに自身をかろし」めて、身のほとをかへりミて、本願をうたかひ候ハまし、」いまこの本願に、十聲一聲までに往生すといふハ、」おほろけの人にハあらしなとそ、おほえ候ハまし、」しかるを善導和尚、未来の衆生の、このうたかひを」おこさむ事をかゝみて、この二の信をあけて、我ゑか」いまた煩悩をも断せす、罪業をもつくる凡夫なれ」とも、ふかく弥陀の本願を信して念佛すれハ、一聲」にいたるまて、決定して往生するよしを釈し」給へる、この釈のことに心にそミていみしく」おほへ候なり、まことに、かくたにも釋し給は」さらましかは、往生は不定にそおほえ候ハましと、」あやうくおほえ候、されハ、この儀を心えわかぬ人や」らむ、わかこゝろのわろけれは、往生ハかなはしとこそハ」申あひて候めれ、そのうたかひの、やかて往生せぬ」心にて候けるものを、たゝ心の善悪をもかへりミす、」つみのかろきおもきをもさたせす、心に往生せんと」おもひて、口に南無阿弥陀佛とゝなへては、こゑに」つきて決定往生のおもひをなすへし、その決定心に」よりて、すなはち往生の業ハさたまるなり、かく心え」ねは、往生ハ不定なり、往生ハ不定とおもへハ、やかて」不定なり、一定と思へは、一定することにて候なり、」されは詮ハ、ふかく信する心と申候は、南無阿弥陀仏と」申は、その仏のちかひにて、いかなる身をもき

ら」はす、一定むかへ給そと、ふかくたのミて、いかなる」とかをもかへりミす、うたかふ心のすこしもなきを申」候なり、又別解、別行の人にやふられされと申ハ、」さとりことに、行ことならむ人のいはむ事に」つきて、念仏をもすて、往生をうたかふ事なかれと」申候也、乃至たとひ仏きたりて光をはなち、舌を」いたして、煩悩罪悪の凡夫、念佛して決定往生」すといふ事ハひか事そ、信すへからす、といふとも、それに」よりて一念も疑心あるへからす、そのゆへハ、一切の仏は、」みな同心に衆生をみちひき給なり、まつ阿弥陀如来」願をおこしてのたまはく、われ仏にならんに、十方の」衆生、わか國にむまれんとねかひて、わか名号を」となふる事、下十聲にいたるまて、わか願力に乗して、」もしむまれすといはゝ、正覺をとらし、とちかひ給ふ、」その願成就して、すてに仏になりたまへり、しかるを、」釋迦佛のこの世界にいてて、この仏の本願をとき」給へり、又六方におの〳〵恒河沙数の佛まし〳〵て、一〻に」舌をのへて、三千大千世界におほひ、無虚妄の」舌相を現して、釋迦佛の弥陁の本願をほめて、」一切衆生をすゝめて、かの仏の名号を唱れハ、さた」めて往生すとゝき給へるは、決定してうたかひなき」事なり、一切衆生、みなこの事を信すへしと」證誠し給へり、かくのことく一切の仏、一佛も」のこらす同心に、一切の凡夫念仏して、決定往生」すへきむねを、あるひハ願をたて、あるひハその願を」とき、あ

るひハその説を證し、すゝめ給へり、この」うへ、またいかなる仏のきたりて、往生すへからすとハ」いへるそ、といふことハりの候そかし、このゆへに、仏きた」りての給とも、おとろくへからすと申なり、佛なを」しかなり、いはむや菩薩をや、いはむや縁覺をや、」いはんや凡夫をやと心えつれは、ひとたひこの念仏」往生の法門をきゝて、信をおこしてのちにハ、いか」なる人とかく申とも、疑心あるへからすとこそハおほえ」候へ、これを深心と申候なり、三に廻向發願心と」いふハ、善導の釈に云、過去およひ今生の身口意業」に修するところの、世出世の善根、およひ他の一切の」凡夫の、身口意業に修するところの、世出世の善根」を随喜して、この自他所修の善根をもて、こと〳〵く」みな真實の深信の心の中に廻向して、かの國に」むまれんと願するなり、また廻向發願といふハ、かならす」決定の真実心の中に廻向して、むまるゝ事をうる」おもひをなせ、この心ふかく信して、なをし金剛のことく」にして、異学、吴見、別解、別行の人のために、動乱破壊」せられされ、といへり、この釋の心は、まつわか身につきて、」さきの世、をよひ今生に、身にも口にもつくりたらむ」切徳を、みなこと〳〵く極樂に廻向して、往生をねかふ也、」次にハわか身の事にても、人の事にても、この世の果報をも」いのり、またおなしのちの世の事なりとも、極樂ならぬ」餘の浄土にむまれんとも、もしは都率にむまれんとも、」もしハ

人中、天上にむまれんともねかひ、かくのことく、」かれにもこれにも、ことなる事に廻向する事なく」して、一向極樂に往生せむと廻向すへきなり、もし」この理を思さためさらむさきに、この世の事をも」いのり、あらぬ餘のかたへも廻向したる功德ともを、ミな」とりかへして、いまはこと〳〵く往生の業になさんと」廻向すへきなり、また一切の善を、みな極楽に廻向すへし」と申せはとて、念佛一門に帰して、一向に念仏を申」さむ人の、ことさらに餘の功德をつくりあつめて、」廻向せよと申には候はす、たゝすきぬるかたにつくり」をきたらん功德をも、もしまたこれよりのちなり」とも、おのつからたよりにしたかひて、念仏のほかに」余の善を修する事あらむをも、しかしなから往生」の業に廻向すへしと申事にて候なり、この心金剛の」ことくにして、別解、別行の人にやふられされと」申候ハ、さきに申つるやうに、吴解の人におしへ」られて、かれこれに廻向する事なかれと申候也、」金剛ハやふれぬものにて候なれは、たとへにとりて、」この心のやふられさらん事も、金剛のことく」なれと申候、これを廻向發願心とは申候なり、三心の」ありさま、おろ〳〵申ひらき候ぬ、この三心を具」して、かならす往生するなり、もし一心もかけぬれハ、」往生する事をえすと、善導釋し給たれは、」往生をねかハん人ハ、もともこの三心を具足すへき」なり、乃至、これを安心とはなつけて候なり、次に」起行といふハ、この申ひ

らき候心はへにて、一向に念仏を」申させおハしますへきに候、またこと行にて候とも、」極樂にかたとりて候ハん行を、かれこれに心をかけす」して、つとめ行すへきにて候なり、おほよそ極樂に」むまれ候へき行には、阿弥陀佛の本願にも、釋迦仏の」説教にも、善導の解釋にも、諸師の料簡にも、」念佛をもて本躰とする事にて候なり、そのほか」の行ハ、とりわきたれ〳〵もすゝめ給事候ハす、」さハ候へとも、いつれも〳〵聖教をならひ、何事」にもおもひあてかひていのり申に、みなこと〳〵く」そのなかたちとならすといふ事の候はねは、」念佛いかにも〳〵信したくおもはさらん人は、」また心のひかむにしたかひて、いつれの行にても」つとめむにしたかひて、極樂に廻向せよと」申候なり、已上、取詮、」

法然上人、ある人に安心起行の消息を送る

釈文

或る人（名字を注せず）、上人の勧化に帰して後、安心起行の様、細かに尋ね申しけるにつきて、記し遣わされける状に云く、「御返事細かに承り候いぬ。かように申すことの一分御悟りを添え、往生の御志も良くなり候いぬべからんには、恐れをも顧み候べきことにて候わず、幾度にても申し度くこそ候え。真に我が身の賤しく、我が心の拙きを顧みず、誰々も皆人の弥陀の誓いを憑みて、

浄土門に入り、念仏一行を専らにする人有り難し

決定往生の道に赴かんとこそ思うことにて候えども、人の心さまざまにて、ただ一筋に、夢幻の浮き世ばかりの楽しみ、栄をのみ求めて、すべて後の世を知らぬ人も候。また、後を恐るべきことを思い知りて、勤め行う人につきても、彼此に心を移して、一筋に一行を憑まぬ人も候。また、いずれの行にても、元より志し始め思い染めつるをば、いかなる理を聞けども、もとの執心を改めぬ人も候。また、今日はいみじく信を起こして、一筋に思い尽きぬと見るほどに、後には打ち捨つる人も候。かくのみ候いて、誠しく浄土の一門に入りて、念仏の一行をもっぱらにする人も有難く候ことは、我が身一つの嘆きとこそは人知れず思い候えども、法によりて人によらぬ理を、失わぬほどの人も有難き世にて候にや。自から勧め試み候にも、我から侮らわしさに、申し出ずることも、捨てむずるにやと、思い知らるることのみにて候ことの、心憂く悲しく候いて、この故は、今一際、疾く浄土に生まれて、悟りを開きて後に、急ぎこの世界に還り来りて、神通方便をもて、結縁の人をも無縁の者をも、讃むるをも謗るをも、皆悉く念仏に勧め入れて、浄土へ迎えんと、誓いを起こしてのみこそ、当時の心をも慰むることにて候に、この仰せにぞ、我が志も験有る心地して、余りに嬉しく候えば、その儀にて候わば、同じくは忠実やかに実に実にし

く、御沙汰候いて、行末も危うからず。往生も頼もしきほどに、思食し定めさせ給うべく候。詮じては、人の計らい申すべきことにて候わず。良く良く案じて御覧候え。このことに過ぎたる御大事、何事かは候べき。この世の名聞利養は、中々申し並ぶるにも忌々しく候。やがて、昨日今日眼に遮り、耳に満ちたる儚さにて候めれば、こと新しく申し立つるにも及び候わず。ただ返す返す御心を静めて思食し計らうべく候。先には聖道・浄土の二門を心得分かちて、浄土一門に入らせましますべき由を申し候いき。今は、浄土門につきて行ずべき様を申すべし。浄土に往生せむと思わむ人は、安心起行と申して、心と行と相応すべきなり。その心というは、『観無量寿経』に説きて、「若し衆生有って、我が国に生まれんと思わん者は、三種の心を起こして則ち往生す。何をか三とする。一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心なり。三心を具せる者は、必ず彼の国に生まる」と言えり。善導和尚、この三心を釈して云く、「始めに至誠心、至というは真なり。誠というは実なり。一切衆生の身口意業に、修する所の解行、必ず真実心の中に為すべきことを明かさむと思う。外には賢善精進の相を現わし、内に虚仮を抱くことを得ざれ。内外明闇を選ばず、必ず真実を用いよ。かるが故に至誠心と名付く」と言えり。この釈の心は、至誠心という

浄土門につきて行ずべき様

心行相応

観経の三心

善導の三心釈

至誠心とは真実心

は真実心なり。その真実というは身に振舞い、口に言い、心に思わんこと、皆真の心を具すべきなり。則ち、内は虚しく、外を飾る心無きをいうなり。この心は、浮き世を背きて、真の道に赴くと思しき人々の中に、多く用意すべき心ばえにて候なり。我も人も、言うばかり無き夢の世を執する心の深かりし名残にて、ほどほどにつけて、名聞利養僅かに振り捨てたるばかりを、堅くいみじき事にして、今世様にも心のたけの煩きに取り成して、悟り浅き世間の人の心をば知らず、貴がりいみじがるを、これこそは本意なれと志したる心にて、都の辺をかき離れて、幽かなる住所を尋ぬるまでも、心の静まらんためを次に成して、本尊・道場の荘厳、籬の内に花の木立なんどの、心細く物哀れならむ事柄を、人に見え聞かれん事をのみ執するほどに、露のことも人の謗りにならんこと有らじと、思い営む心より外に思い交うること無し。かようなる心にのみなして、仏の誓いを憑み、往生を願わんということは、思い入れず沙汰もせぬことの、やがて至誠心欠けて、往生せぬ心ばえにて候なり。また、かく申し候えば、ひとえに今世の人目をば、いかにても有りなむ、人の謗りを顧みぬが良きぞと、申す儀にては候わず。人目を顧みることは候えども、それをのみ思い入れて往生の障りになる方をば、顧みぬように引き為され候わんことの、返す返す愚かに口惜し

四句の不同

真実の行者

二種の深心

く候えば、御身に当たりても、御心得させ参らせんがために申し候なり。この心につきて四句の不同有るべし。一には、外相は貴げにて、内心は貴からぬ有り、二には、外相も内心もともに貴からぬ人有り。三には、外相は貴げも無くて、内心は貴き人有り。四には、内外共に貴き人有り。この四人が中に、前の二人は、今嫌うところの至誠心欠けたる人なり。これを虚仮の人と名付くべし。後の二人は、至誠心具したる人なり。これを真実の行者と名付くべし。されば詮ずるところは、ただ内心に真の心を起こして、外相をば良くも悪しくも、とてもかくても有るべきかと、覚え候なり。大方この世を厭わんことも、極楽を願わんことも、人目ばかりを思わで、誠の心を起こすべきにて候なり。これを至誠心と申すなり。二に深心というは、善導の釈に云く、「深心というは、すなわちこれ深く信ずる心なり。これに二種有り。一には決定して深く、我が身は煩悩具足せる罪悪生死の凡夫なり、善根薄少にして、曠劫よりこの方、常に流転して、出離の縁無しと信ずべし。二には深く、彼の阿弥陀仏の四十八願をもて、衆生を摂取し給う、すなわち名号を称すること、下十声に至るまで、彼の願に乗じて、定めて往生することを得と信じて、乃至一念も疑うこと無きが故に、深心と名付く。また深心というは、決定して心を立てて、仏教に従いて修行して、長

我が身のほどを信じ仏の願を信ずる

善導の釈なくば往生は不定と覚束無し

く疑心を除くなり。一切の別解・別行・異学・異見・異執のために、退失傾動せられざれ」といえり。この釈の心は、初めには我が身のほどを信じ、後には仏の願を信ずるなり。その故は、若し初めの信心を挙げずして、後の信心を釈し給わば、諸々の往生を願わん人、たとい本願の名号をば唱うとも、自ら心に貪欲・瞋恚の煩悩をも起こし、身に十悪・破戒等の罪悪をも造りたることあらば、妄りに自身を軽しめて、身のほどを顧みて、本願を疑い候わまし。今この本願に、十声一声までに往生すというは、朧げの人にはあらじなどぞ、覚え候わまし。しかるを善導和尚、未来の衆生の、この疑を起こさむことを鑑みて、この二の信を挙げて、我等がいまだ煩悩をも断ぜず、罪業をも造る凡夫なれども、深く弥陀の本願を信じて念仏すれば、一声に至るまで、決定して往生する由を釈し給える、この釈の殊に心に染みていみじく覚え候なり。まことにかくだにも、釈し給わざらましかば、往生は不定にぞ覚え候わましと、危うく覚え候。されば、この儀を心得分かぬ人やらむ、我が心の悪ければ往生は叶わじとこそは、申し合いて候めれ。その疑のやがて往生せぬ心にて候いける者を、ただ心の善悪をも顧みず、罪の軽き重きをも沙汰せず、心に往生せんと思いて、口に南無阿弥陀仏と唱えては、声につきて決定往生の思いをなすべし。その決定心によりて、

深く信ずるとは、仏の誓いを疑う心の少しも無きことをいう

一切の仏、同心に衆生を導き給う

即ち往生の業は定まるなり。かく心得ねば、往生は不定なり。往生は不定と思えば、やがて不定なり。一定と思えば、一定することにて候なり。されば詮は、深く信ずる心と申し候は、南無阿弥陀仏と申せば、その仏の誓にて、いかなる身をも嫌わず、一定迎え給うぞと、深く憑みて、いかなる科をも顧みず、疑う心の少しも無きを申し候なり。また、別解・別行の人に破られざれと申すは、悟り異に、行異ならむ人の言わむことにつきて、念仏をも捨て、往生を疑うことなかれと申し候なり。（乃至）たとい、仏来りて光を放ち、舌を出して、「煩悩罪悪の凡夫、念仏して決定往生すということは僻事ぞ、信ずべからず」と言うとも、それによりて、一念も疑心有るべからず。その故は、一切の仏は、皆同心に衆生を導き給うなり。まず阿弥陀如来、願を起こして宣わく、「我仏にならんに、十方の衆生、我が国に生まれんと願いて、我が名号を唱うること、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、もし生まれずと言わば、正覚を取らじ」と誓い給う。その願成就して、すでに仏になり給えり。しかるを、釈迦仏の、この世界に出でてこの仏の本願を説き給えり。また六方におのおの恒河沙数の仏ましまして、一々に舌を舒べて、三千大千世界に覆い、無虚妄の舌相を現じて、釈迦仏の、弥陀の本願を誉めて、一切衆生を勧めて、彼の仏の名号を唱うれば、

定めて往生すと説き給えるは、決定して疑無きことなり、一切衆生、皆このことを信ずべしと証誠し給えり。かくのごとく一切の仏、一仏も残らず同心に、一切の凡夫念仏して、決定往生すべき旨を、あるいは願を立て、あるいはその願を説き、あるいはその説を証し、勧め給えり。このうえ、またいかなる仏の来りて、「往生すべからず」とは言えるぞという理の候ぞかし。このゆえに、仏来りて宣うとも、驚くべからずと申すなり。仏なおしかなり、いわんや菩薩をや、いわんや縁覚をや、いわんや凡夫をやと心得つれば、一度この念仏往生の法門を聞きて、信を起こして後には、いかなる人、兎角申すとも、疑心有るべからずとこそは覚え候え。これを深心と申し候なり。三に廻向発願心というは、善導の釈に云く、「過去および今生の身口意業に修するところの、世出世の善根、および他の一切の凡夫の、身口意業に修するところの、世出世の善根を随喜して、この自他所修の善根をもって、悉く皆真実の深信の心の中に廻向して、彼の国に生まれんと願ずるなり。また廻向発願というは、必ず決定の真実心の中に廻向して、生まるることを得る思いを為せ。この心深く信じて、なおし金剛のごとくにして、異学・異見・別解・別行の人のために、動乱破壊せられざれ」といえり。この釈の心は、まず我が身につきて、先の世、および今生に、身にも口にも

諸功徳を悉く極楽に廻向して往生を願うなり

造りたらん功徳を、皆ことごとく極楽に廻向して、往生を願うなり。次には我が身のことにても、人のことにても、この世の果報をも祈り、また同じ後の世のことなりとも、極楽ならぬ余の浄土に生まれんとも、もしは都率に生まれんとも、もしは人中・天上に生まれんとも願い、かくのごとく、彼れにも此れにも、異なることに廻向すること無くして、一向極楽に往生せむと廻向すべきなり。もしこの理を思い定めざらむ先に、この世のことをも祈り、あらぬ余の方へも廻向したる功徳どもを、皆取り返して、今はことごとく往生の業になさんと廻向すべきなり。また一切の善を皆極楽に廻向すべしと申せばとて、念仏一門に帰して、一向に念仏を申さむ人の、ことさらに余の功徳を造り集めて廻向せよと申すには候わず。ただ過ぎぬる方に造り置きたらん功徳をも、もしまたこれより後なりとも、自から便りに従いて、念仏の外に余の善を修すること有らむをも、しかしながら往生の業に廻向すべしと申すことにて候なり。この心金剛のごとくにして、別解・別行の人に破られざれと申し候は、前に申しつるように、異解の人に教えられて、彼れ此れに廻向することなかれと申し候なり。金剛は破れぬものにて候なれば、譬えに取りてこの心の破られざらんことも、金剛のごとくなれと申し候。これを廻向発願心とは申し候なり。三心の有りさま、おろおろ申し開き

余善も往生の業に廻向すべし

安心
起行

往生の業は念仏を以て本体となす

候いぬ。この三心を具して、必ず往生するなり。「若し一心も欠けぬれば、往生する事を得ず」と、善導釈し給いたれば、往生を願わん人は、最もこの三心を具足すべきなり。（乃至）これを安心とは名付けて候なり。次に起行というは、この申し開き候心ばえにて、一向に念仏を申させおわしますべきに候。また異行にて候とも、極楽に方取りて候わん行を、彼れ此れに心を掛けずして、勤め行ずべきにて候なり。おおよそ極楽に生まれ候べき行には、阿弥陀仏の本願にも、釈迦仏の説教にも、善導の解釈にも、諸師の料簡にも、念仏をもて本体とすることにて候なり。その外の行は、取り分き誰々も勧め給うこと候わず。さは候えども、いずれもいずれも聖教を習い、なにごとにも思い宛いて祈り申すに、皆ことごとくその仲立ちとならずということの候わねば、念仏いかにもいかにも信じたく思わざらん人は、また心の引かんに従いて、いずれの行にても勤めむに従いて、極楽に廻向せよと申し候なり」（已上、詮を取る。）

〔第二段〕　詞書

またある人、往生の用心につきて、おほつか」なきことを百四十五ケ条まてしるして、」たつね申たりけるに、上人の御返事あり」き、少、これをしるす、」

一、心を一にして、こゝろよくなをり候はすとも、」何事をゝこなひ候はすとも、念仏はかり」にても、浄土へハまいり候へきか、荅、心のミた」るゝハ、これ凡夫のならひにて、ちからをよは」ぬ事にて候、たゝ心をひとつにして、よく」御念仏せさせたまはゝ、その罪を滅して」往生せさせ給へきなり、その妄念よりもをも」き罪も、念仏たにもし候へハうせ候なり、」

一、日所作ハ、かならすかすをさため候はすと」も、よまれんにしたかひてよみ、念仏も申」候へきか、荅、かすをさため候はねハ、懈怠に」なり候へハ、数をさため候かよき事にて候、」

一、にら、き、ひる、鹿をくひて、香うせ候はすとも、」常に念仏ハ申候へきやらん、荅、念佛ハなにゝ」もさはらぬ事にて候、」

一、念仏をハ、日所作に、いくらはかりあてゝか申候へき、」荅、念仏のかすハ、一万遍をはしめにて、二万、三」万、五万、六万、乃至十万まて申候なり、このな」かに御こゝろにまかせて、おほしめし候はん程」を、申させおハしますへし、」

一、五色の糸ハ、仏にはひたりにと仰候き、わか手」には、いつれのかたにていかゝひき候へき、荅、左右の」手にてひかせ給へし、」

一、時し候は、功徳にて候やらん、かならすすへき」事にて候やらん、荅、ときハ功

徳うる事にて候也、」六斎の御時そ、さも候ぬへき、また御大事にて、」御病なともおこらせおはしましぬへく候ハゝ、さな」くとも、たゝ御念仏たにもよく〳〵候はゝ、それ」にて生死をはなれ、浄土に往生せさせおはし」まさんする事ハ、これによるへく候、」

一、かならす仏を見、いとをひかへ候はすとも、われ申」さすとも、人の申さん念仏をきゝても、死候」はゝ、浄土にハ往生し候へきやらん、荅、かならす」いとをひくといふ事候はす、仏にむかひまいら」せねとも、念仏たにもすれハ、往生し候なり、」また、きゝてもし候、それハよく〳〵信心ふかくて」の事にて候、」

一、なかく生死をはなれ、三界にむまれしとおもひ」候に、極楽の衆生となりても、その縁つきぬれハ、」この世にむまると申候ハ、まことにて候か、たとひ」国王ともなり、天上にもむまれよ、たゝ三界をわか」れんとおもひ候に、いかにつとめおこなひてか」かへり候ハさるへき、答、これもろ〳〵のひか事に」て候、極楽へひとたひむまれ候ぬれハ、なかくこの」世にかへる事候はす、みなほとけになる事」にて候也、たゝし、人をみちひかんためにハ、こと」さらにかへる事も候、されとも生死にめくる」人にてハ候はす、三界をはなれ、極楽に往生」するには、念仏にすきたる事ハ候はぬ也、よく〳〵」御念佛の候へき也、」

一、哥よむは罪にて候か、荅、あなかちに得候はし、但」罪もす、功徳にもなる、」
一、酒のむはつみにて候か、荅、まことにハ、のむへくも」なけれとも、この世のならひ、」
一、錫杖ハかならす誦すへきか、荅、さなくとも、そのいと」まに念仏一遍も申へし、尼法師こそ、ありく」とき、虫のために誦候へ、」
一、臨終に、善知識にあひ候はすとも、日ころの念仏」にて往生ハし候へきか、荅、善知識にあハすとも、臨」終おもふ様ならすとも、念仏申さハ往生すへし、」
一、心に妄念のいかにも思はれ候ハ、いかゝし候へき、荅、」たゝ、よく〳〵念仏を申させたまへ、」
一、ねてもさめても口あらはて念仏申候はんハ、」いかゝ候へき、荅、くるしからす、」
一、六斎に、にら、ひるいかに、荅、めささらんハよく候、」
一、毎日の所作に、六万、十万の数遍を念珠をくりて申」候はんと、二万、三万を念珠をたしかに一つゝ申候」はむと、いつれかよく候へき、荅、凡夫のならひ、二万、三万」をあつとも、如法にハかなひかたからん、たゝ数遍のおほ」からんにハすくへからす、名号を相續せんためなり、」かならすしも数を要とするにハあらす、

上人、ある人の種々の不審に返書を送る。一百四十五箇条問答の抄録

たゝ常」に念仏せんかためなり、かすをさためぬハ懈怠の因」縁なれハ、数反をすゝむるにて候、」

一、魚鳥くいて、いかけして、経ハよみ候へきか、荅、いかけして」よむ本躰にて候、せてよむハ、功徳と罪とともに候、但、」いかけせても、よまぬよりハよむハよく候、」

一、所作かきてしいれ、かねてかゝむするを、まつし候、いか」に、荅、しいるゝハくるしからす、かねてハ懈怠なり、」

一、破戒の僧、愚癡の僧、供養せんも功徳にて候か、荅、破戒」の僧、愚癡の僧を、するゑの世にハ、仏のことくたとむ」へきにて候也、この御使に申候ぬ、きこしめし候へ、」

この御詞ハ、上人のまさしき御手なり、阿弥陀經の」うらにをしたり、」

釈文

またある人、往生の用心につきて、覚束無きことを百四十五か条まで記して、尋ね申したりけるに、上人の御返事有りき。少々これを記す。

一、心を一にして、心能く直り候わずとも、何事を行ない候わずとも、念仏ば

散乱念仏の往生の可否

かりにても、浄土へは参り候べきか。答、心の乱るるは、これ凡夫の習いにて、力およばぬことにて候。ただ心を一にして、能く御念仏せさせ給わば、その罪を滅して往生させ給うべきなり。その妄念よりも重き罪も、念仏だにもし候えば失せ候なり。

日所作

一、日所作は、必ず数を定め候わずとも、読まれんに従いて読み、念仏も申し候べきか。答、数を定め候わねば、懈怠になり候えば、数を定め候が良きことにて候。

五辛

一、韮・葱・蒜・鹿を食いて、香失せ候わずとも、常に念仏は申し候べきやらん。答、念仏はなににも障らぬことにて候。

念仏の数

一、念仏をば、日所作に、幾らばかり当ててか申し候べき。答、念仏の数は、一万遍を初めにて、二万、三万、五万、六万、乃至十万まで申し候なり。この中に御心に任せて、思し召し候わんほどを、申させおわしますべし。

五色糸

一、五色の糸は、仏には左にと仰せ候いき。我が手には何れの方にて、いかが引き候べき。答、左右の手にて引かせ給うべし。

斎

一、斎し候は、功徳にて候やらん、必ずすべきことにて候やらん。答、斎は、功徳得ることにて候なり。六斎の御斎ぞ、さも候いぬべき。また御大事にて

御病なども起こらせおわしましぬべく候わば、さ無くとも、ただ御念仏だにも能く能く候わば、それにて生死を離れ、浄土に往生せさせおわしまさんずることは、これによるべく候。

一、必ず仏を見、糸をひかえ候わずとも、我申さずとも、人の申さん念仏を聞きても、死に候わば浄土には往生し候べきやらん。答、必ず糸を引くということ候わず。仏に向かい参らせねども、念仏だにもすれば、往生し候なり。また聞きてもし候。それは能く能く信心深くてのことにて候。

一、長く生死を離れ、三界に生まれじと思い候に、極楽の衆生となりても、その縁尽きぬれば、この世に生まると申し候は、真にて候か。たとい、国王ともなり、天上にも生まれよ、ただ三界を別れんと思い候に、いかに勤め行ないてか帰り候わざるべき。答、これ諸々の僻事にて候。極楽へ一度生まれ候いぬれば、長くこの世に帰ること候わず。皆仏になることにて候なり。ただし、人を導かんためには、ことさらに帰ることも候。されども生死に廻る人にては候わず。三界を離れ、極楽に往生するには、念仏に過ぎたることは候わぬなり。能く能く御念仏の候べきなり。

一、歌詠むは罪にて候か。答、強ちに得候わじ。ただ、罪もす、功徳にもなる。

糸引

極楽から還ることなし、但し人を導くためこの世に還ることあり

歌詠

飲酒

一、酒飲むは罪にて候か。答、真には、飲むべくも無けれども、この世の習い。

錫杖

一、錫杖は必ず誦すべきか。答、さ無くとも。その暇に念仏一遍も申すべし。

尼法師こそ、歩くとき、虫のために誦し候え。

善知識

一、臨終に、善知識に会い候わずとも、日頃の念仏にて往生はし候べきか。答、善知識に会わずとも、臨終思うようならずとも、念仏申さば往生すべし。

妄念

一、心に妄念のいかにも思われ候は、いかがし候べき。答、ただ、能く能く念仏を申させ給え。

口漱がずの念仏

一、寝ても覚めても口洗わで念仏申し候わんは、いかが候べき。答、苦しからず。

六斎ときの韮・蒜

一、六斎に、韮・蒜いかに。答、召さざらんは良く候。

数遍を勧む

一、毎日の所作に、六万、十万の数遍を、念珠を繰りて申し候わんと、二万、三万を念珠を確かに一つずつ申し候わむと、何れか良く候べき。答、凡夫の習い、二万、三万を当つとも、如法には叶い難からん。ただ、数遍の多からんには過ぐべからず。名号を相続せんためなり。必ずしも数を要とするには非ず、ただ常に念仏せんがためなり。数を定めぬは懈怠の因縁なれば、数遍を勧むるにて候。

沃懸

一、魚鳥食いて、沃懸して、経は読み候べきか。答、沃懸して読む、本体にて候。せで読むは、功徳と罪とともに候。ただし、沃懸せでも、読まぬよりは読むは良く候。

所作

一、所作欠きてしいれ、兼ねて欠かむずるを、まずし候。いかに。答、しいるるは苦しからず、兼ねては懈怠なり。

破戒僧への供養

一、破戒の僧、愚痴の僧、供養せんも功徳にて候か。答、破戒の僧、愚痴の僧を、末の世には、仏のごとく貴むべきにて候なり。この御使いに申し候いぬ、聞し召し候え。この御詞は、上人の正しき御手なり。『阿弥陀経』の裏に押したり。

〔奥書〕

廿二巻折帋数廿一丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第二十三巻

〔第一段〕　詞書

或人、往生の用心につきて、条〻の不審を尋」申たりけるに、上人の御返事云、」

一、毎日の御所作、六万遍めてたく候、うたかひの」心たにも候はねハ、十念一念も、往生ハし候へとも、」多く申候へは、上品にむまれ候、尺にも、上品花」臺見慈主、到者皆因念佛多、と候へは、」

一、宿善によりて往生すへし、と人の申候らん、」ひか事にてハ候はす、かりそめのこの世の」果報たにも、さきの世の罪、功徳によりて、」よくもあしくもむまるゝ事にて候へハ、まし」て往生程の大事、かならす宿善によるへ」しと、聖教にも候やらん、たゝし、念仏往生」ハ、宿善のなきにもより候はぬやらん、父母」をころし、佛身よりちをあやしたる」ほとの罪人も、臨終に十念申て往生すと、」觀經にもみえて候、しかるに宿善あつき」善人ハ、おしへ候はねとも悪におそれ、仏道」に心すゝむ事にて候へは、五逆なとはいかにも〳〵」つくるましき事にて候也、それに五逆の罪人、」念仏十念にて往生をとけ候時に、宿善の」なきにもより候まし

く候、されハ經に、若人」造多罪、得聞六字名、火車自然去、華臺即」末迎、極重悪人、無他方便、唯稱念仏、得生極ゟ、」若有重業障、無生浄土因、乗弥陀願力、必」生安樂國、この文の心ハ、もし五逆をつくれ」りとも、旃陁の六字の名をきかは、火の車」自然にさりて、蓮臺きたりてむかふへし、」又、きわめておもき罪人の、他の方便なからむ」も、弥陁をとなへたてまつらハ、極樂にむまる」へし、また、もしおもきさはりありて、浄土に」むまるへき因なくとも、弥陀の願力にのり」なは、安ゟ國にむまるへしと候へは、たの」もしく候、又、善導の尺にハ、曠劫よりこの」かた、六道に輪廻して、出離の縁なからん常」没の衆生をむかへんかために、阿弥陀仏は」仏になりたまへりと候、その常没の衆生と申」候は、恒河のそこにしつミたるいき物の、身おほ」きになかくして、その河にはゝかりて、えはたら」かす、つねにしつみたるに、悪世の凡夫をハたとへ」られて候、又、凡夫と申二の文字をハ、狂酔の」ことしと弘法大師尺したまへり、けにも凡夫」の心は、ものくるひ、さけにゑいたるかことくし」て、善悪につけておもひさためたる事」なし、一时に煩悩もゝたひましはりて、善悪」みたれやすけれハ、いつれの行なりとも、わか」ちからにては行しかたし、しかるに、生死を」はなれ、仏道にいるにハ、菩提心をおこし、煩悩を」つくして、三祇百却、難行苦行してこそ、仏に」ハ

なるへきにて候に、五濁の凡夫、わかちからに」ては願行そなはる事かなひかたくて、六道」四生にめくり候也、弥陁如来、このことをかなし」ミ思食て、法蔵菩薩と申し、いにしへ、我ホか」行しかたき僧祇の菩行を、兆載永刼かあひた、」功をつミ徳をかさねて、阿弥陀ほとけになり」たまへり、一仏にそなへ給へる四智、三身、十力、」無畏ホの一切の内證の功徳、相好、光明、説法、利」生ホの外用の功徳、さま〳〵なるを、三字の」名字のなかにおさめいれて、この名号を、十聲」一聲まてもとなへんものを、かならすむかへん、」もしむかへすハ、われ仏にならしとちかひ給」へるに、かの佛、いま現に世にまし〳〵て、仏に」なりたまへり、名号をとなへん衆生、往生」うたかふへからすと、善導もおほせられて候也、」この樣をふかく信して、念仏おこたらす申」て、往生うたかはぬ人を、他力信したるとは」申候也、世間の事にも他力ハ候そかし、足な」え腰ゐたるものゝ、とをき道をあゆまむと」おもはんに、かなはねは船、車にのりてや」すくゆく事、これ我ちからにあらす、乗物」のちからなれハ他力也、あさましき悪世の凡夫」の、諂曲の心にてかまへつくりたるのりもの」にたにも、かゝる他力あり、まして五刼のあひた、」思食さためたる本願他力のふね、いかたに」乗なは、生死の海をわたらん事、うたかひ思」食へからす、しかのミならす、やまひをいやす」草木、くろかねをと

る磁石、不思議の用力也、」麝香はかうはしき用あり、さいの角ハ水」をよせぬちからあり、これみな、心なき草木、」ちかひおゝこさぬけたものなれとも、もとより」不思議の用力ハ、かくのミこそ候へ、まして仏法」不思議の用力ましまさゝらむや、されは、」念仏ハ、一聲に八十億刧の罪を滅する用あり、」弥陀は、悪業深重のものを来迎し給ちから」ましますと思食とりて、宿善のありなし」も沙汰せす、罪のふかきあさきもかへりミす、」たゝ名号となふるものゝ往生するそと信し」思食へく候、すへて破戒も持戒も、貧窮も福」人も、上下の人をきらはす、たゝ我名号」をたに念せは、石、かわらを變して金とな」さむかことし、来迎せんと御約束候也、法照」禅師の五會法事讃にも、彼仏因中立弘誓、」聞名念我惣来迎、不簡貧窮将冨貴、不簡下智与高才、」不簡多聞持浄戒、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、」能令瓦礫變成金、たゝ御すゝをくらせおはし」まして、御舌をたにもはたらかされす候ハんは、」懈怠にて候へし、たゝし、善導の三縁の中の」親縁を尺したまふに、衆生ほとけを礼す」れハ、仏これをミたまふ、衆生仏をとなふれは、」佛これをきゝたまふ、衆生ほとけを念」すれハ、仏も衆生を念したまふ、かるかゆへに、」阿弥陀佛の三業と、行者の三業と、かれこれひ」とつになりて、仏も衆生もおや子のことく」なるゆへに、親縁となつくと候めれハ、御手に」すゝをもたせた

まひて候ハゝ、仏これを御覧」候へし、御心に念仏申すそかしと思食候ハゝ、」佛も行者を念し給へし、されハ、仏に見え」まいらせ、念せられまいらする、御身にてわたら」せたまひ候はんする也、さは候へとも、つねに」御舌のはたらくへきにて候也、三業相應の」ためにて候へし、三業とハ、身と口と意とを」申候也、しかも仏の本願の稱名なるかゆへに」こゑを本躰とハ思食へきにて候、さて我耳」にきこゆる程申候は、高聲の念仏のうちにて」候也、」

一、御無言目出候、たゝし、無言ならて申念佛は、」功德すくなしと思食なハあしく候、念仏をは」金にたとへたる事にて候、金ハ火にやくにも」いろまさり、水にいるゝにも損せす候、かやうに」念仏ハ、妄念のおこる时申候へともけかれす、もの」を申まするにもまきれ候はす、そのよしを御」心えなから、御念仏の程ハ、こと事ませすして、」いますこし念佛のかすをそえむとおほし」めさんハ、さんて候、もし思食わすれて、ふともの」なと仰候て、あなあさまし、いまハこの念佛」むなしくなりぬと、思食す御事ハ、ゆめ〳〵候」ましく候、いかやうにて申候とも、往生の業に」て候へく候、」

一、百万遍の事、仏の願にてハ候はねとも、小阿弥陀」經に、若一日、若二日、乃至七日、念仏申人、極楽に」生するとかゝれて候へは、七日念仏申へきにて」候、そ

の七日の程のかすハ、百万遍にあたり候よし、」人師尺して候時に、百万遍ハ七日申へきにて候へ」とも、たえ候ハさらん人ハ、八日、九日なとにも申され」候へかし、されハとて、百万遍申さらん人の、むまる」ましきにては候はす、一念十念にても、むまれ候」なり、一念十念にても、むまれ候ほとの念仏と」おもひ候うれしさに、百万遍の功徳を、かさぬるにて候也、」

一、七分全得の事、仰のまゝに申けに候、さてこそ」逆修ハすることにて候へ、さ候へは、後の世をとふら」ひぬへき人の候はむ人も、それをたのますして、」われとはけみて念仏申て、いそき極楽へま」いりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生」を利益し、父母師長の生所をたつねて、心のまゝ」にむかへとらんと、思へきにて候也、また、當時日こと」の御念仏をも、かつ〳〵廻向しまいらせられ候」へし、なき人のために念佛を廻向し候へは、」阿弥陀ほとけ光をはなちて、地獄、餓鬼、畜生」をてらし給候へハ、この三悪道にしつみて苦を」うくるもの、そのくるしミやすまりて、命おハり」てのち、解脱すへきにて候、大經云、若在三途」勤苦之處、見此光明、皆得休息、無復苦惱、壽終」之後、皆蒙解脱、」

一、本願のうたかはしき事もなし、極楽のねか」はしからぬにてハなけれとも、往生一定とおもひ」やられて、とくまいりたきこゝろの、あさゆふハ」しミ〳〵ともお

ほえすと仰候事、まことによからぬ」御事にて候、浄土の法門をきけとも、きかさ」るかことくなるハ、このたひ、三悪道よりいてて、」罪いまたつきさるもの也、と経にもとかれて候、」又、この世をいとふ御心のうすくわたらせ給にて候、」そのゆへハ、西国へくたらむともおもはぬ人に、」舩をとらせて候はんに、ふねの水にうかふ」事なしとハうたかひ候はねとも、當时さし」ているましけれハ、いたくうれしくも候まし」きそかし、さて、かたきの城なとにこめられて」候はんか、からくしてにけてまかり候はむみち」に、おほきなる河海なとの候て、わたるへき」やうもなからむおり、おやのもとより、舩を」まうけてむかへにたひたらむハ、さしあた」りて、いかはかりかうれしく候へき、これかやうに」貪瞋煩悩のかたきにしはられて、三界の」焚籠にこめられたる我ホを、弥陀悲母の御」こゝろさしふかくして、名号の利劔をもち」て、生死のきつなをきり、本願の要舩を」苦海の波にうかへて、かの岸につけたまふ」へし、とおもひ候はむうれしさハ、歡𢘓のた」もとをしほり、渇仰のおもひきもにそむへき」にて候、身の毛もいよたつほとに思へき」にて候を、のさに思食候はむハ、ほいなく候へ」とも、それもことはりにて候、罪つくる事」こそ、おしへ候はねとも、心にもそミておほえ」候へ、そのゆへは、無始よりこのかた、六趣にめくり」し时も、かたちハかはれとも、心はかはらす」

して、いろ〳〵さま〳〵につくりならひて候へハ、」いまもうゐ〳〵しからす、やすくハつくられ候へ、」念仏申て往生せはやとおもふ事ハ、この」たひはしめてわつかに聞得たる事にて」候へハ、きとは信せられ候はぬ也、そのうへ、人の」心は頓機、漸機とて、ふたしなに候也、頓機は、」きゝてやかてさとるこゝろにて候、漸機ハ、やう〳〵」さとる心にて候也、ものまうてなとをし候に、」足はやき人ハ一時にまいりつくところへ、」あしおそきものは、日くらしにもかなはぬ」樣にハ候へとも、まいり心たにも候へは、つゐにハ」とけ候やうに、ねかふ御こゝろだにわたらせ」給候はゝ、とし月をかさねても、御信心もふかく」ならせおはしますへきにて候、」

一、日ころ念佛申せとも、臨終に善知識に」あはすハ往生しかたし、また、やまひ大事」にて心みたれハ往生しかたし、と申候らんハ、」さもいはれて候へとも、善導の御心にては、」極楽へまいらむとこゝろさして、おほくもすく」なくも念仏申さむ人の、命つきん时ハ、阿弥陀」仏、聖衆とゝもにきたりて、むかへ給へし、と」候へハ、日ころたにも御念仏候はゝ、御臨終に善」知識候はすとも、仏ハむかへさせたまふへきに」て候、又、善知識のちからにて、往生すると申候」事ハ、觀經の下三品の事にて候、下品下生」の人なとこそ、日ころ念佛も申候はす、」往生の

こゝろも候はぬ逆罪の人の、臨終に」はしめて善知識にあひて、十念具足して」往生するにて候へ、日ころより他力の願力を」たのミ、思惟の名号をとなへて、極ふへまいらむ」とおもひ候はん人は、善知識のちから候はす」とも、仏ハ来迎したまふへきにて候、又、かろき」やまひをせむといのり候はむ事も、こゝろ」かしこくハ候へとも、やまひもせてしぬる人も」うるはしく、おはる時にハ断末摩のくるしミ」とて、八万の塵勞門より無量のやまひ、」身をせめ候事、百千のほこ、つるきにて、身を」きりさくかことし、されハまなこなきかことく」して、みむとおもふものをもみす、舌のねす」くミて、いはんと思こともいはれす候也、これハ」人間の、八苦のうちの死苦にて候へハ、本願信して」往生ねかひ候はむ行者も、この苦ハのかれ」すして悶絶し候とも、いきのたえむ时ハ、阿弥陀」ほとけのちからにて、正念になりて往生を」し候へし、臨終は、かミすちきるか程の事に」て候へハ、よそにて凡夫さためかたく候、たゝ、」仏と行者とのこゝろにてしるへく候也、そのうへ三」種の愛心おこり候ぬれハ、魔縁たよりをえ」て、正念をうしなひ候也、この愛心をハ、善知識」のちからはかりにてハ、のそきかたく候、阿弥陀」ほとけの御ちからにて、のそかせたまふへく候、」諸邪業繫無能礙者、たのもしく思食へく候、」又、後世者とおほしき人の申けに候ハ、まつ」正念に住して、念仏申さん时

に、仏来迎し」たまふへしと、申けに候へとも、小阿弥陀経に」ハ、与諸聖衆、現在其前、是人終时、心不顛倒、」即得往生阿弥陀仏極楽國土と候へハ、人の命」おはらんする時、阿弥陀ほとけ聖衆とゝもに」目のまへにきたり給たらむを、まつミまい」らせてのちに、心ハ顛倒せすして極楽に」むまるへしとこそ心えて候へ、されハ、かろき病」をせはやと、いのらせ給はむいとまにて、いま」一遍もやまひなき时、念仏を申て、臨終に」ハ阿弥陀ほとけの来迎にあつかりて、三種の愛」心をのそき、正念になされまいらせて、極楽に」むまれむと思食へく候、されハとて、いたつらに」候ぬへからん、善知識にもむかはておはらむと」思食へきにてハ候はす、先徳たちのおしへに」も、臨終の时に、あみた仏を西のかへに安置」しまいらせて、病者そのまへに西むきにふし」て、善知識に念仏をすゝめられよ、とこそ候へ、」それこそあらまほしき事にて候へ、たゝし、」人の死の縁ハ、かねておもふにもかなひ候はす、」俄におほちみちにておはる事も候、又、大小便」利のところにてしぬる人も候、前業のかれ」かたくて、太刀、かたなにて命をうしなひ、火に」やけ、水におほれて、いのちをほろほすた」くひ多候へは、さやうにてしに候とも、日ころ」念仏申て、極楽へまいる心たにも候人ならハ、」いきのたえむ时に、弥陀、観音、勢至きたり」てむかへ給へし、と信し思食へきにて候也、往生要」集にも、

時所諸縁を論せす、臨終に往生を」もとめねかふに、その便宜をえたる事、」念仏にはしかすと候へハ、たのもしく候、」

一、所作おほくあてかひて、かゝむよりハ、すく」なく申さむ、一念もむまるなれハと仰候事、」まことにさも候なむ、たゝし、礼讃の中にハ、」十聲一聲定得往生、乃至一念無有疑心と」尺せられて候へとも、疏の文にハ、念〻不捨者、是」名正定之業と候へハ、十聲一聲にむまると信」して、念〻にわするゝ事なく、となふへき」にて候、又、弥陀名号相續念とも尺せられて候、」されハ、あひついて念すへきにて候、一食の」あひたに三度はかりおもひいてむハ、よき」相續にて候、常にたに思食いてさせ給候はゝ、」十万、六万申させ給候はすとも、相續にて候」ぬへけれとも、人の心ハ、當時みる事きく」事に、うつるものにて候へは、なにとなく御」まきれのうちにハ、思食いてん事かたく候」ぬへく候、御所作おほくあてゝ、つねにすゝを」もたせ給候ハゝ、思食いて候ぬと覚候、たとひ、こ」とのさはりありて、かゝせおはしまし」て候とも、あさましや、かきつる事よと思食」候はゝ、御心にかけられ候はんするそかし、とて」もかくても、御わすれ候はすハ、相續にて候へし、」また、かけて候はん御所作を、次の日申入られ候」はむ事、さも候なん、それもあす申いれられ候」ハんすれハとて、御ゆたん候はむはあしく候、」せめての

事にてこそ候へ、御心えあるへく候、」

一、魚鳥に七ケ日のいミの候なる事、さもや候らん、」え見及はす候、地躰ハいきとしいけるものハ、」過去のちゝはゝにて候なれハ、くふへき事」にてハ候はす、また、臨終にハさけ、魚、鳥、き」にら、ひるなとハ、いまれたる事にて候へハ、病」なとかきりになりてハ、くふへきものにてハ」候はねとも、當时きとしぬはかりハ候はぬ病」の、月日つもり、苦痛もしのひかたく候はんにハ、」ゆるされ候なむと覚候、御身おたしくて、念仏申」さんと思食て、御療治候へし、命をしむハ往生の」さはりにて候、病はかりをハ、療治ハゆるされ候なんと」おほえ候、」

法然上人、ある人の往生用心の問いに答える

六万遍の日所作

宿善

釈文

ある人、往生の用心につきて、条々の不審を尋ね申したりけるに、上人の御返事に云く、

一、毎日の御所作、六万遍、目出度く候。疑いの心だにも候わねば、十念一念も、往生はし候えども、多く申し候えば、上品に生まれ候。釈にも、「上品の華台に慈主を見たてまつる。到る者皆念仏の多きに因る」と候えば。

一、「宿善によりて往生すべし」と人の申し候らん、僻事にては候わず。仮初

のこの世の果報だにも、先の世の罪、功徳によりて、良くも悪しくも生まるることにて候えば、まして往生ほどの大事、必ず宿善によるべしと、聖教にも候やらん。ただし、念仏往生は、宿善の無きにもより候わぬやらん。「父母を殺し、仏身より血を零したるほどの罪人も、臨終に十念申して往生す」と、『観経』にも見えて候。しかるに、宿善厚き善人は、教え候わねども、悪に恐れ、仏道に心進むことにて候えば、五逆などはいかにもいかにも作るまじきことにて候なり。それに、五逆の罪人、念仏十念にて往生を遂げ候時に、宿善の無きにもより候まじく候。されば『経』に、「もし人、多罪を造るとも、六字の名を聞くことを得ば、火車自然に去り、華台すなわち来迎す。極重の悪人、他の方便無からんに、唯念仏を称すれば、極楽に生ずることを得。もし重き業障ありて、浄土に生ずる因無くとも、弥陀の願力に乗じて、必ず安楽国に生ぜん」と。この文の心は、もし五逆を造れりとも、弥陀の六字の名を聞かば、火の車自然に去りて、蓮台来りて迎うべし。また極めて重き罪人の、他の方便無からむも、弥陀を称え奉らば、極楽に生まるべし。またもし重き障り有りて、浄土に生まるべき因無くとも、弥陀の願力に乗りなば、安楽国に生まるべしと候えば、頼もしく候。また善導の釈には、「曠劫よりこのかた、六道

に輪廻して、出離の縁無からん常没の衆生を迎えんがために、阿弥陀仏は仏になり給えり」と候。その常没の衆生と申し候は、恒河の底に沈みたる生き物の、身大きに長くして、その河に憚りて、え働かず、常に沈みたるに、悪世の凡夫をば譬えられて候。また凡夫と申す一つの文字をば、狂酔のごとしと弘法大師釈し給えり。実にも凡夫の心は、物狂い、酒に酔いたるがごとくして、善悪につけて思い定めたること無し。一時に煩悩百度交わりて、善悪乱れ易ければ、何れの行なりとも、我が力にては行じ難し。しかるに、生死を離れ、仏道に入るには、菩提心を起こし、煩悩を尽くして、三祇百劫、難行苦行してこそ、仏にはなるべきにて候に、五濁の凡夫、我が力にては願行備わること叶い難くて、六道四生に巡り候なり。弥陀如来、このことを悲しみ思食して、法蔵菩薩と申しし古、我等が行じ難き僧祇の苦行を、兆載永劫が間、功を積み徳を重ねて、阿弥陀ほとけになり給えり。一仏に備え給える四智・三身・十力・無畏等の、一切の内証の功徳、相好・光明・説法・利生等の外用の功徳、さまざまなるを、三字の名字の中に収め入れて、「この名号を、十声一声までも唱えん者を、必ず迎えん。もし迎えずば、我仏にならじ」と誓い給えるに、彼の仏、今現に世にましまして、仏になり給えり。「名号を唱え

ん衆生、往生疑うべからず」と、善導も仰せられて候なり。この様を深く信じて、念仏怠らず申して、往生疑わぬ人を、他力信じたるとは申し候なり。世間のことにも他力は候ぞかし。足萎え腰居たる者の、遠き道を歩まむと思わんに、叶わねば船・車に乗りて易く行くこと、これ我が力に非ず、乗物の力なれば他力なり。浅ましき悪世の凡夫の、諂曲の心にて構え作りたる乗物にだにも、かかる他力有り。まして五劫の間、思食し定めたる本願他力の船・筏に乗りなば、生死の海を渡らんこと、疑い思食すべからず。しかのみならず、病を癒す草木、鉄を取る磁石、不思議の用力なり。麝香は香ばしき用有り。犀の角は水を寄せぬ力有り。これ皆、心無き草木、誓い起こさぬ獣なれども、元より不思議の用力は、かくのみこそ候え。まして仏法不思議の用力ましまさざらんや。されば、念仏は、一声に八十億劫の罪を滅する用有り。弥陀は、悪業深重の者を来迎し給う力ましますと思食取りて、宿善の有り無しも沙汰せず、罪の深き浅きも顧みず、ただ名号唱うる者の往生するぞと信じ思食べく候。「すべて破戒も持戒も、貧窮も福人も、上下の人を嫌わず、ただ我が名号をだに念ぜば、石・瓦を変じて金と成さんがごとし、来迎せん」と御約束し候なり。法照禅師の『五会法事讃』にも、「彼の仏因中に弘誓を

立てたまえり。名を聞きて我を念ぜば、惣て来迎せん。貧窮と富貴と
を簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と浄戒を持するとを簡ばず、破戒と
罪根の深きとを簡ばず、ただ廻心して多く仏を念ぜしめて、能く瓦礫をして変じ
て金と成らしめん」。ただ御数珠を繰らせおわしまして、御舌をだにも働かさ
れず候わんは、懈怠にて候べし。ただし、善導の、三縁の中の親縁を釈し給
うに、「衆生仏を礼すれば、仏これを見給う。衆生仏を唱うれば、仏これを
聞き給う。衆生仏を念ずれば、仏も衆生を念じ給う。かるが故に、阿弥陀仏
の三業と、行者の三業と、かれこれ一つになりて、仏も衆生も親子のごとく
なる故に、親縁と名付く」と候めれば、御手に数珠を持たせ給いて候わば、
仏これを御覧候べし。御心に念仏申すぞかしと思食候わば、仏も行者を念
じ給うべし。されば、仏に見え参らせ、念ぜられ参らする、御身にて渡らせ給
い候わんずるなり。さは候えども、常に御舌の働くべきにて候なり。三業相
応のためにて候べし。三業とは、身と口と意とを申し候なり。しかも仏の本
願の称名なるが故に、声を本体とは思食べきにて候。さて我が耳に聞こゆ
るほど申し候は、高声の念仏の中にて候なり。

一、御無言目出たく候。ただし、無言ならで申す念仏は、功徳少なしと思食しな

ば悪しく候。念仏をば金に譬えたることにて候。金は火に焼くにも色増り、水に入るるにも損ぜず候。かように念仏は、妄念の起こる時申し候えども穢れず、物を申し混ずるにも紛れ候わず。その由を御心得ながら、御念仏のほどは、異事混ぜずして、今少し念仏の数を添えむと思し召さんは、さんて候。もし思食忘れて、ふと物など仰せ候いて、「あな浅まし、今はこの念仏空しくなりぬ」と、思食す御事は、努々候まじく候。いかようにて申し候とも、往生の業にて候べく候。

百万遍

一、百万遍のこと、仏の願にては候わねども、『小阿弥陀経』に、「もしは一日、もしは二日ないし七日、念仏申す人、極楽に生ずる」と書かれて候えば、七日念仏申すべきにて候。その七日のほどの数は、百万遍に当たり候由、人師釈して候時に、百万遍は七日申すべきにて候えども、堪え候わざらん人は、八日、九日などにも申され候えかし。さればとて、百万遍申さざらん人の、生まるまじきにては候わず。一念十念にても、生まれ候なり。一念十念にても、生まれ候ほどの念仏と思い候嬉しさに、百万遍の功徳を、重ぬるにて候なり。

七分全得

一、七分全得のこと、仰せのままに申すげに候。さてこそ逆修はすることにて

候え。さ候えば、後の世を訪いぬべき人の候わむ人も、それを憑まずして、我と励みて念仏申して、急ぎ極楽へ参りて、五通三明を悟りて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所を尋ねて、心のままに迎え取らんと、思うべきにて候なり。また当時日毎の御念仏をも、かつがつ廻向し参らせられ候べし。亡き人のために念仏を廻向し候えば、阿弥陀ほとけ光を放ちて、地獄・餓鬼・畜生を照らし給い候えば、この三悪道に沈みて苦を受くる者、その苦しみ休まりて、命終わりて後、解脱すべきにて候。『大経』に云く、「若し三途勤苦の処に在りて、この光明を見たてまつれば、皆休息を得て、また苦悩無し。寿終の後、皆解脱を蒙る。」

一、本願の疑わしきことも無し、極楽の願わしからぬにては無けれども、往生一定と思い遣られて、疾く参りたき心の、朝夕はしみじみとも覚えずと仰せ候こと、真に良からぬ御事にて候。「浄土の法門を聞けども、聞かざるがごとくなるは、この度、三悪道より出でて、罪いまだ尽きざる者なり」と経にも説かれて候。またこの世を厭う御心の薄く渡らせ給うにて候。その故は、西国へ下らむとも思わぬ人に船を取らせて候わんに、船の水に浮かぶこと無しとは疑い候わねども、当時さして要るまじければ、甚く嬉しくも候まじきぞか

し。さて、敵の城などに籠められて候わんが、辛くして逃げて罷り候わむ道に、大きなる河海などの候いて、渡るべきようも無からむ折、親の許より、船を設けて迎えに賜びたらむは、指し当たりて、いかばかりか嬉しく候べき。これがように貪瞋煩悩の敵に縛られて、三界の樊籠に籠められたる我等を、弥陀悲母の御志深くして、名号の利剣を持ちて、生死の絆を切り、本願の要船を苦海の波に浮かべて、彼の岸に着け給うべし、と思い候わむ嬉しさは、歓喜の袂を絞り、渇仰の思い肝に染むべきにて候。身の毛も弥立つほどに思うべきにて候を、のさに思食し候わむは、本意無く候えども、それも理にて候。罪造ることこそ、教え候わねども、心にも染みて覚え候え。その故は、無始よりこのかた、六趣に廻りし時も、形は変われども、心は変わらずして、色々さまざまに作り習いて候えば、今も初々しからず、易くは作られ候え。念仏申して往生せばやと思うことは、この度初めて僅かに聞き得たることにて候えば、屹度は信ぜられ候わぬなり。その上、人の心は頓機・漸機とて、一品に候なり。頓機は、聞きてやがて悟る心にて候。漸機は、ようよう悟る心にて候なり。物詣でなどをし候に、足速き人は一時に参り着く所へ、足遅き者は、日暮らしにも叶わぬ様には候えども、参り心だにも候えば、遂には遂げ候様に、

願う御心だに渡らせ給い候わば、年月を重ねても、御信心も深くならせおわしますべきにて候。

一、「日頃念仏申せども、臨終に善知識に会わずば往生し難し。また病大事にて心乱れば往生し難し」と申し候らんは、さも言われて候えども、善導の御心にては、「極楽へ参らむと志して、多くも少なくも念仏申さむ人の、命尽きん時は、阿弥陀仏、聖衆とともに来りて、迎え給うべし」と候えば、日頃だにも御念仏候わば、御臨終に善知識候わずとも、仏は迎えさせ給うべきにて候。また「善知識の力にて、往生する」と申し候ことは、『観経』の下三品のことにて候。下品下生の人などこそ、日頃念仏も申し候わず、往生の心も候わぬ逆罪の人の、臨終に初めて善知識に会いて、十念具足して往生するにて候え。日頃より他力の願力を憑み、思惟の名号を唱えて極楽へ参らむと思い候わん人は、善知識の力候わずとも、仏は来迎し給うべきにて候。また軽き病をせむと祈り候わむことも、心賢くは候えども、病もせで死ぬる人も麗しく、終わる時には断末摩の苦しみとて、八万の塵労門より無量の病、身を責め候こと、百千の矛・剣にて、身を切り裂くがごとし。されば眼無きがごとくして、見むと思う物をも見ず、舌の根疎みて、言わんと思うことも言われ

ず候なり。これは人間の、八苦のうちの死苦にて候えば、本願信じて往生願い候わむ行者も、この苦は逃れずして、悶絶し候とも、息の絶えむ時は、阿弥陀ほとけの力にて、正念になりて往生をし候べし。臨終は、髪筋切るがほどのことにて候えば、他所にて凡夫定め難く候。ただ仏と行者との心にて知るべく候なり。その上、三種の愛心起こり候いぬれば、魔縁便りを得て、正念を失い候なり。この愛心をば、善知識の力ばかりにては、除き難く候。阿弥陀ほとけの御力にて、除かせ給うべく候。諸の邪業繫の能く礙うる者無し、頼もしく思食べく候。また後世者と思しき人の申すげに候は、まず正念に住して、念仏申さん時に、仏来迎し給うべしと、申すげに候えども、『小阿弥陀経』には、「諸の聖衆と与に、現に其の前に在す。是の人終わる時、心顚倒せず、即ち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」と候えば、人の命終わらんずる時、阿弥陀ほとけ、聖衆とともに、目の前に来り給いたらむを、まず見まいらせて後に、心は顚倒せずして、極楽に生まるべしとこそ心得て候え。されば軽き病をせばやと、祈らせ給わむ暇にて、今一遍も病無き時、念仏を申して、臨終には阿弥陀ほとけの来迎に預りて、三種の愛心を除き、正念になされ参らせて、極楽に生まれむと思食べく候。さればとて、徒に候

いぬべからん、善知識にも向かわで終わらむと思食べきにては候わず。先徳達の教えにも、「臨終の時に、阿弥陀仏を西の壁に安置し参らせて、病者その前に西向きに臥して、善知識に念仏を勧められよ」とこそ候え。それこそあらまほしきことにて候え。ただし、人の死の縁は、予て思うにも叶い候わず。にわかに大路道にて終わることも候。また大小便利の所にて死ぬる人も候。前業逃れ難くて、太刀・刀にて命を失い、火に焼け、水に溺れて、命を滅ぼす類多く候えば、左様にて死に候とも、日頃念仏申して、極楽へ参る心だにも候人ならば、息の絶えむ時に、弥陀・観音・勢至来りて、迎え給うべし、と信じ思食べきにて候なり。『往生要集』にも、「時所諸縁を論ぜず、臨終に往生を求め願うに、その便宜を得たること、念仏にはしかず」と候えば、頼もしく候。

一、「所作多く宛いて、欠かんよりは、少なく申さん、一念も生まるなれば」と仰せ候こと、真にさも候いなむ。ただし、『礼讃』の中には、「十声一声も定んで往生を得、ないし一念も疑心有ること無し」と釈せられて候えども、『疏』の文には、「念々に捨てざる、是れを正定の業と名付く」と候えば、十声一声に生まると信じて、念々に忘るること無く、唱うべきにて候。また「弥陀

の名号を相続して念ぜよ」とも釈せられて候。されば、相次いで念ずべきにて候。一食の間に三度ばかり思い出でむは、良き相続にて候。常にだに思食出でさせ給い候わば、十万、六万申させ給い候わずとも、相続にて候いぬべけれども、人の心は、当時見ること聞くことに、移るものにて候えば、何となく御紛れの中には、思食出でんこと難く候いぬべく候。御所作多く当てて、常に数珠を持たせ給い候わば、思食出で候いぬと覚え候。仮令、事の障り有りて、欠かせおわしまして候とも、浅ましや、欠きつることよと思食候わば、御心に掛けられ候わんずるぞかし。とてもかくても、御忘れ候わずば、相続にて候べし。また欠けて候わん御所作を、次の日申し入れられ候わむこと、さも候いなん。それも明日申し入れられ候わんずればとて、御油断候わむは悪しく候。せめてのことにてこそ候え。御心得有るべく候。

魚鳥の忌

一、魚鳥に七か日の忌の候なること、さもや候らん。え見及ばず候。地体は生きとし生ける物は、過去の父母にて候なれば、食うべきことにては候わず。また臨終には、酒・魚・鳥・葱・韮・蒜などは、忌まれたることにて候えば、病など限りになりては、食うべき物にては候わねども、当時、屹度死ぬばかりは候わぬ病の、月日積もり、苦痛も忍び難く候わんには、許され候なむと覚え

候。御身穏しくて、念仏申さんと思食て、御療治候べし。命惜しむは往生の障りにて候。病ばかりをば、療治は許され候いなんと覚え候。

〔第二段〕　詞書

上人、鎮西の修行者に、観想念仏の非を説く

鎮西より上洛せる修行者、上人の庵室に」参して、いまた見参にいらさるさきに、御」弟子に對して、稱名のとき、佛の相好に心を」かくることハ、いかゝ候へきと、たつね申けれハ、めて」たくこそ侍らめと申けるを、上人道場にて」きゝ給けるか、あかり障子をあけ給て、源空ハ」しからす、たゝ、若我成佛　十方衆生　稱我名号」下至十聲　若不生者　不取正覺　彼佛今現　在世成佛」當知本誓　重願不虛　衆生稱念　必得往生、とおもふ」はかりなり、我ホか分にて、いかに観すとも、更ニ」如説の観にあらし、たゝふかく本願を」たのみて、口に名号をとなふるのミ、假令」ならさる行なりとそ、仰られける、」

釈文

鎮西より上洛せる修行者、上人の庵室に参じて、いまだ見参に入らざる先に、御弟子に対して、「称名の時、仏の相好に心を掛くることは、いかが候べ

き」と、尋ね申しければ、「目出度くこそ侍らめ」と申しけるを、上人道場にて聞き給いけるが、明障子を開け給いて、源空はしからず。ただ「若し我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称えて、下十声に至るまで、若し生ぜずんば、正覚を取らじ。彼の仏今現に、世に在して成仏したまう。当に知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば、必ず往生を得ん」と思うばかりなり。我等が分にて、如何に観ずとも、さらに如説の観に非じ。ただ深く本願を憑みて、口に名号を唱うるのみ、仮令ならざる行なりとぞ、仰せられける。

〔奥書〕

廿三巻析帋数二十丁

四十八巻繪傳　知恩院常住

第二十四巻

〔第一段〕　詞書

上人の給ハく、阿弥陀経ハ、たゝ念佛往生」はかりを説とハ心得へからす、文ニ隠顕ありと」いへとも、廣畧義をもて心得れハ、四十八」願をこと〳〵く説給へる経也、舎利弗、如我」今者、讃嘆阿弥陀仏、不可思議功徳、といへる阿」弥陀ほとけの功徳ハ、即四十八願也、念佛往」生をとくハ、その中の第十八の願をさす也、」又、この経に、一日七日といへるを、只一日、七日ニ」限と意得るハ僻事也、善導和尚、観経の疏」に、上品上生の一日七日を尺給ニ、従具此功徳」已下、正明修行時節延促、上尽一形、下至一」日一時一念等、或従一念十念、至一時一日」一形、大意者、一發心已後、誓畢此生、無有」退轉、唯以浄土為期と、判給へり、この尺を」もて准知するに、阿弥陀経の一日七日も又、」如此意得へき也、この尺に三の意あり、一ニハ」多より少にいたり、二にハ少より多に至り、」三にハ、大意ハ一發心已後退轉なしといへる」なり、初の二ハ要にあらす、後の一その要也、」所詮ハ、往生の心を發してのち、命終まて退」せさる、これを大意とするなり、凡この阿」弥陀経ハ、我朝に都鄙處〻に

多く流布せり、」法華經と寐勝王經とハ、諸宗の学徒、兼學すへ」きよし、桓武天皇の御时、宣旨を下され」て定置れしかハ、演説者とて、法華を解説」する師ハ多くなりたりけれとも、暗誦する」人なかりけれハ、法花を暗誦すへきよし、」かさねて宣旨を下されけるのち、持経者多くい」できたれり、法花ハ加様ニ、宣下によりて」こそ流布せられたれ、阿弥陁經ハ、其沙汰な」けれとも、自然ニ流布して、處ゝの道場に、みな」例时とて毎日にかならす阿弥陁經をよみ、一切」の諸僧、阿弥陁經をよますといふ事なし、」これひとへに浄土教有縁のいたすところ」なり、事のおこりをたつぬれハ、叡山の」常行堂より出たり、彼常行堂の念佛」ハ、慈覚大師、渡唐のとき將来し給へる」勤行なり、とそ仰られける、」

法然上人、阿弥陀経の大意を説く

第十八願

釈文

上人宣わく、『阿弥陀経』は、ただ念仏往生ばかりを説くとは心得べからず。文に隠顕有りといえども、広略の義をもって心得れば、四十八願をことごとく説き給える経なり。「舎利弗。我今、阿弥陀仏の不可思議の功徳を讃嘆するがごとし」と言える阿弥陀ほとけの功徳は、すなわち四十八願なり。念仏往生を説くは、その中の第十八の願を指すなり。また、この経に、「一日七日」といえる

を、ただ一日、七日に限ると意得るは僻事なり。善導和尚、『観経の疏』に、上品上生の一日七日を釈し給うに「具此功徳より已下は、正しく修行の時節の延促を明かす。上一形を尽くし、下一日一時一念等に至るまで、あるいは一念十念より一時一日一形に至るまでなり。大意は、一たび発心して已後、誓いてこの生を畢るまで、退転有ること無く、ただ浄土をもって期と為す」と判じ給えり。この釈をもって准知するに、『阿弥陀経』の一日七日も、また、かくのごとく意得べきなり。この釈に三つの意有り。一には多より少に至り、二には少より多に至り、三には「大意は一発心已後、退転無し」と言えるなり。初めの二つは要に非ず、後の一つ、その要なり。所詮は、往生の心を発して後、命終まで退せざる、これを大意とするなり。およそこの『阿弥陀経』は、我が朝に都鄙処々に多く流布せり。『法華経』と『最勝王経』とは、諸宗の学徒、兼学すべき由、桓武天皇の御時、宣旨を下されて定め置かれしかば、演説者とて、『法華』を解説する師は多くなりたりけれども、暗誦する人無かりければ、『法華』を暗誦すべき由、重ねて宣旨を下されける後、持経者多く出で来れり。『法華』はかように、宣下によりてこそ流布せられたれ。『阿弥陀経』は、その沙汰無けれども、自然に流布して、処々の道場に、皆例時とて毎日に必ず『阿弥陀経』を読み、一切の諸僧、『阿弥

陀経』を読まずということ無し。これひとえに浄土教有縁の致すところなり。ことの起こりを尋ぬれば、叡山の常行堂より出でたり。彼の常行堂の念仏は、慈覚大師、渡唐の時将来し給える勤行なり」とぞ、仰せられける。

上人、諸宗祖師の極楽往生人たることを説く

〔第二段〕　詞書

上人の給ハく、諸宗の祖師は、みな極楽に」生し給へり、所謂、真言の祖師龍樹菩天台」の祖師南岳、智者、章安、妙楽、三論の祖師」僧叡、花厳の祖師智儼、法相宗ニハ懐感禅師、」我宗をすて、浄土宗に入る、天親菩ハ法相宗」の祖師也、往生論を作て極楽をすゝむ、達摩」宗の祖師智覚禅師ハ、上品上生の往生人也、」其外、非名僧のなかに、往生人これおほし、あく」るにいとまあらすと、」

釈文

上人宣わく、「諸宗の祖師は、皆極楽に生じ給えり。いわゆる真言の祖師龍樹菩薩、天台の祖師南岳・智者・章安・妙楽、三論の祖師僧叡、華厳の祖師智儼、法相宗には懐感禅師、我が宗を捨てて浄土宗に入る。天親菩薩は、法相宗の祖師なり。『往生論』を作りて極楽を勧む。達摩宗の祖師智覚禅師は、上品

上生の往生人なり。その外、非名僧の中に、往生人これ多し。挙ぐるに暇有らず」と。

〔第三段〕　詞書

或时、聖光房、法力房、安楽房侍けるに、安楽」房、上人に尋申云、我ゝことときの輩、かた」く十重をもたもたす、常ニ妄念をお」こし、又勇猛精進ならすして、我身の善悪」をもかへりみす、たゝ弥陁の本願を仰て、」決定往生の思をなし侍るハ、往生し侍へしや」と、上人の給ハく、其條勿論也、所詮決定心を」生せハ、往生すへき人なり、煩悩、罪悪ゝの、往生」を障不障をハ、凡夫の心にてハ覺知すへからす」といへとも、本願に相應する程の念佛申たら」むにハ、それを障导して、往生をさまたくる罪」ハあるへからす、往生ハ念仏の信否によるへし、更」に罪悪の有無にハよるへからさるなり、すてに」凡夫の往生をゆるす、なむそ妄念の有無をき」らふへきや、と仰らるゝに、安楽房又申云、虚」假の物ハ往生せすと申すハ、何樣に心得侍へき」そや、上人の給ハく、虚假といふハ、ことさらに結」構する輩也、好ますして自然に虚假ならむは、」往生の鄣にあらす、念佛の信心を發たらむ」人ハ、必定して往生すへし、更に疑へからす、善導」の尺を能ゝ意得へきなり、善導おハしま」さゝらましか

ハ、我ホいかてか、このたひ生死」を離へきや、と仰られて、落涙し給あひ」た、聖光房、法力房、安ホ房みなともに涙を」をさへて信心をましけり、其時、聖光房、我ハ」一切ニ往生を疑ハずと申されけれハ、上人又の」給ハく、貴房達ハ少ゝの罪過ありとも、争」往生を遂さらむや、但、外人にハ意得ていひき」かすへき也、強盛心をおこさす、落涙するに」及ハすとも、念佛たにも申さハ往生すへき也、」見思、塵沙、無明の煩悩か、よろつの障导をハ」なす也、念佛の一行ハ、この煩悩にもさへられ」す、往生をとけ、十地究竟する也、他宗ニハ実」教にも権教にも、蜜教にも顕教にも、十」地究竟する事ハ、漸頓を論せす、極たる大」事なり、しかるに、たゝ念佛の一行に依」て往生をとけ、十地願行、自然ニ成就する事ハ、」誠に甚深殊勝の事也とそ仰られける、」

安楽房遵西、上人に往生のことを尋ねる

釈文

ある時、聖光房・法力房・安楽房侍りけるに、安楽房、上人に尋ね申して云く、「我等ごときの輩、固く十重をも持たず、常に妄念を起こし、また勇猛精進ならずして、我が身の善悪をも顧みず、ただ弥陀の本願を仰ぎて、決定往生の思いをなし侍るは、往生し侍るべしや」と。上人宣わく、「その条勿論な

り。所詮決定心を生ぜば、往生すべき人なり。煩悩・罪悪等の往生を障え障えざるをば、凡夫の心にては、覚知すべからずといえども、本願に相応するほどの念仏申したらむには、それを障碍して、往生を妨ぐる罪は有るべからず。往生は念仏の信否によるべし。さらに、罪悪の有無にはよるべからざるなり。すでに凡夫の往生を許す、なんぞ妄念の有無を嫌うべきや」と仰せらるるに、安楽房また申して云く、「虚仮のものは往生せずと申すは、いかように心得侍るべきぞや」。上人宣わく、「虚仮というは、殊更に結構する輩なり。好まずして、自然に虚仮ならむは、往生の障りにあらず。念仏の信心を発したらん人は、必定して往生すべし。さらに疑うべからず、善導の釈を能く能く意得べきなり。善導おわしまさざらましかば、我等いかでか、この度生死を離るべきや」と仰せられて、落涙し給う間、聖光房・法力房・安楽房、皆ともに涙を押さえて信心を増しけり。そのとき、聖光房、「我は一切に往生を疑わず」と申されければ、上人、また宣わく、「貴房達は少々の罪過有りとも、いかでか往生を遂げざらむや。ただし、外人には意得て言い聞かすべきなり。強盛心を起こさず、落涙するに及ばずとも、念仏だにも申さば往生すべきなり。見思・塵沙・無明の煩悩が、万の障碍をばなすなり。念仏の一行は、この煩悩にも障えられず、往生を遂げ、

虚仮

聖光房、法力房、安楽房、信心を増す

念仏は煩悩にも障えられず

十地願行、自然に成就す

十地究竟するなり。他宗には、実教にも権教にも、密教にも顕教にも、十地究竟することは、漸頓を論ぜず。極めたる大事なり。しかるに、ただ念仏の一行によりて往生を遂げ、十地願行、自然に成就することは、誠に甚深殊勝のことなり」とぞ仰せられける。

〔第四段〕　詞書

元久二年正月廿一日、尋常なる尼女房」たち、あまた上人の御坊へまいりて、戒をも」受たてまつり、念佛往生の樣をも承らむ」と申けれハ、上人まつ戒をさつけられ、其後浄」土の法門をのへ給に、まつ聖道、浄土の二門を」わけ、聖道難行の樣を仰らるゝに、殊ニ天台宗」に對して尺し給ひ、四種三昧の難行なる」事をのへ給て、南岳大師入滅のきさみ、諸」の弟子ニつけての給ハく、汝等、方ホ、般舟四」種三昧にをいて、身命をかへりみす修行」すへくは、われ十年世にありて、汝ホを供給」すへしとの給に、苦行かなひかたきによりて、」弟子ホ返答に及さりしかハ、大師入滅し給」き、師すてに入滅せんとし給へるか、しはらくも」存命せむとの給ハむをハ、いかなる妄語をも」かまへて、師の命を惜まむためにハ修行し」てんとこそ、申しつへけれとも、始終かなふへか」らさるあひた、返答せすしてやミにしかハ、師」すなハ

ち入滅し給へり、何況當时の我ホをや、」傳教大師弟子達ニ、四種三昧を一つゝあてゝ、」修行せさせらるゝ事侍りき、慈覺大師は」常坐三昧にあたりて修行し給けるに、常坐」難行なりとて、あらためて常行三昧となると申」せり、かくのことき の修行ハ、上古より修し」かたき事顕然也、何況當世の凡夫哉とて、聖道」門の難行なる事、浄土門の修しやすきやう、」こま〳〵と仰られて、所詮末代の仏法修行、そ」の證をうる事、只念佛の一行なり、是則」弥陀の本願に順するか故也と、の給けれハ、信」心まことをいたし、低頭合掌してかへり」にけり、」

尼女房ら、上人に念仏往生の様を聞く

釈文

元久二年正月二十一日、尋常なる尼女房達、数多上人の御坊へ参りて、「戒をも受け奉り、念仏往生の様をも承らむ」と申しければ、上人まず戒を授けられ、その後、浄土の法門を述べ給うに、まず聖道・浄土の二門を分け、聖道難行の様を仰せらるるに、ことに天台宗に対して釈し給い、四種三昧の難行なることを述べ給いて、南岳大師、入滅の刻、諸の弟子に告げて宣わく、「汝等、方等・般舟四種三昧において、身命を顧みず、修行すべくば、我十年世に在りて、汝等を供給すべし」と宣うに、苦行叶い難きによりて、弟子等返

答に及ばざりしかば、大師入滅し給いき。師すでに入滅せんとし給えるが、「暫くも存命せむ」と宣わむをば、「いかなる妄語をも構えて、師の命を惜しまむためには、修行してん」とこそ、申しつべけれども、始終叶うべからざる間、返答せずして止みにしかば、師則ち入滅し給えり。いかにいわんや当時の我等をや。伝教大師、弟子達に、四種三昧を一つずつ当てて、修行せさせらるることと侍りき。慈覚大師は常坐三昧に当たりて修行し給いけるに、常坐難行なりとて、改めて常行三昧となると申せり。かくのごときの修行は、上古より修し難きこと顕然なり。いかにいわんや当世の凡夫をやとて、聖道門の難行なること、浄土門の修し易き様、細々と仰せられて、「所詮末代の仏法修行、その証を得ること、ただ念仏の一行なり。これすなわち弥陀の本願に順ずるが故なり」と、宣いければ、信心誠をいたし、低頭合掌して帰りにけり。

末代の仏法修行、証を得るは念仏の一行のみ

〔第五段〕　詞書

法性寺の左京大夫信實朝臣の伯母なりける」女房の、尋申けるにつきて、上人の御返事」云、念佛の行者の存候へき樣ハ、後世をおそれ、」往生をねかひて念佛すれハ、をはる时かならす」来迎せさせ給よしを存して、念仏申より外の」事候ハす、三心と

申候も、ふさねて申时は、」たゝ一の願心にて候也、そのねかふ心の、いつ」はらすかさらぬ方をハ、至誠心と申候、この心の」まことにて念佛すれハ、臨終に来迎すといふ」事を、一念もうたかはぬ方を深心とハ申候、」このうへ、わか身もかの土へむまれんとおもひ、」行業をも往生のためとむくるを、廻向心とハ」申候也、このゆへにねかふ心いつハらすして、けニ」往生せんとおもひ候へハ、をのつから三心ハ具足す」る事にて候也、抑、中品下生に、来迎の候はぬ」ことハあるましけれハ、とかれぬにてハ候ハす、」九品往生に、各みなあるへき事の、畧せられ」てなき事も候也、善導の御心ハ、三心も品ゝ」にわたりてあるへしとみえて候、品ことにおほ」くの事候へとも、三心と來迎とハかならすある」へきにて候也、往生をねかハん行者ハ、かならす三」心をおこすへきにて候へハ、上品上生に是をと」きて、餘の品ゝをも是になそらへて、しるへし」とみえて候、又、我ホ戒品のふね、いかたもやふれ」たれハ、生死の大海を渡へき縁も候ハす、智」恵の光もくもりて、生死のやミをてらしか」たけれハ、聖道の得道にもゝれたる我ホかた」めに、ほとこし給他力と申候ハ、第十九の來迎」の願にて候へハ、文に見えす候とも、かならす来」迎ハあるへきにて候也、ゆめゝゝ御うたかひ」候へからす、あなかしこ〳〵、源空、」

上人、藤原信実の伯母に、返事を送る

三心もまとめていえばただ一つの願心

三心と来迎

釈文

法性寺の左京大夫信実朝臣の、伯母なりける女房の、尋ね申しけるにつきて、上人の御返事に云く、「念仏の行者の存じ候べき様は、後世を恐れ、往生を願いて念仏すれば、終わる時必ず来迎せさせ給う由を存じて、念仏申すより外のこと候わず。三心と申し候も、総ねて申すときは、ただ一つの願心にて候なり。その願う心の、偽らず飾らぬ方をば、至誠心と申し候。この心の誠にて念仏すれば、臨終に来迎すということを、一念も疑わぬ方を、深心とは申し候。この上、我が身も彼の土へ生まれんと思い、行業をも往生のためと向くるを、廻向心とは申し候なり。この故に願う心偽らずして、実に往生せんと思い候えば、自から、三心は具足することにて候なり。そもそも中品下生に、来迎の候わぬことは有るまじければ、説かれぬにては候わず。九品往生に、各皆有るべきことの、略せられて無きことも候なり。善導の御心は、三心も品々に亘りて有るべしと見えて候。品ごとに多くのこと候えども、三心と来迎とは、必ず有るべきにて候なり。往生を願わん行者は、必ず三心を起こすべきにて候えば、上品上生にこれを説きて、余の品々をも、これに準えて知るべしと見えて

第十九来迎の願

候。また、我等戒品の船・筏も破れたれば、生死の大海を渡るべき縁も候わず。智恵の光も曇りて、生死の闇を照らし難ければ、聖道の得道にも漏れたる我等がために、施し給う他力と申し候は、第十九の来迎の願にて候えば、文に見えず候とも、必ず来迎は有るべきにて候なり。努々御疑い候べからず。あなかしこ、あなかしこ。源空」

〔第六段〕　詞書

尼妙真、顕密の行を捨て、念仏往生を遂げる

伊豆國走湯山に、妙真といふ尼ありき、法華の持者、」真言の行人なりき、事のたよりありて上洛の」とき、上人の教化にあつかりて後、なかく餘行を」すてゝ、ひとへに念佛を行す、その功つもりて、つねに」化佛をみたてまつる、更に餘人にかたらす、たゝ、同行」の尼一人にこれをしめす、あるとき不注年月、明日の申刻」に往生すへしといふ、更にやまひなし、时刻たか」はす、翌日申时に端坐合掌し、高聲念仏」して往生をとく、妓樂天にきこへ、昊香室に」みちて、奇瑞耳目をおとろかしける、」

釈文

伊豆国走湯山に、妙真という尼在りき。『法華』の持者、真言の行人なりき。

ことの便り有りて上洛のとき、上人の教化に与りて後、長く余行を捨てて、ひとえに念仏を行ず。その功積もりて、常に化仏を見奉る。さらに余人に語らず。ただ同行の尼一人にこれを示す。ある時（年月を注せず）、「明日の申刻に往生すべし」と言う。更に病無し。時刻違わず、翌日申時に端坐合掌し、高声念仏して、往生を遂ぐ。妓楽天に聞こえ、異香室に満ちて、奇瑞耳目を驚かしける。

〔奥書〕

廿四巻析紙数十九丁

四十八巻繪傳　知恩院
　　常住

第二十五巻

〔第一段〕　詞書

勸化上都にさかりにして、道徳邊鄙に」をよひしかは、鎌倉の二品禅尼金剛戒歸依もとも」ふかくして、蓮上房尊覺をつかひとして、念佛」往生の事たつね申されたりけれは、かの御返事云、」御文くハしくうけたまはり候ぬ、さてハ念佛の」功徳をハ、佛も説つくしかたしとの給へり、又智恵」第一の舍利弗、多聞第一の阿難も、念仏の功徳は」しりかたしとの給し廣大の善根にて候へは、まして」源空なむと申つくすへしともおほへ候ハす、弥陀の」むかしちかひ給し本願は、あまねく一切衆生の」ためなれは、有智無智、有才無才、善人悪人、持戒」破戒、たときいやしき、おとこおんなもへたてす、」もしハ佛の在世の衆生、もしは佛の滅後の衆生、」もしは尺迦の末法万年のゝち、三寶みなうせて」のちの衆生までも、たゝ念仏はかりこそ、現當の」いのりになり候めれ、このゆへに、きたりて往生の」道をたつね候人には、有智無智を申さす、一」すちに専修念仏をすゝめ候なり、ましてさやうに」専修念佛申とゝめなんとつかまつる人は、佛法の」まなこしゐて解脱をうしなへり、

闡提の輩なり、いかに申候とも、御變改候へからす、強に信せ」さらむ人を、御すゝめ候へからす、仏もかなひ給ハさる事なり、」

一、異解の人の、餘の善根を修せむに御助成ありて、」思食へきやうは、我はこれ一向専修にて、決定往生」すへき身なり、他人のとをき道を、わかちかき道に」結縁せさせむとおほしめさは、専修をさまたけ候ハす、」

一、この世のいのりに、念佛のほかに、仏にも神にも」申し、經をよミかき、仏をつくらむは、専修をさふる」行にてハ候へからす、」

一、念佛を申候事ハ、やう〳〵の義候へとも、たゝ六字を」となふるなかに、一切の行ハおさまり候なり、」心にハ本願をたのミ、口には名号をとなへ、手」には念珠をとるはかりなり、常に心をかくるか、」きはめたる決定往生の業にて候也、念佛の行は、」もとより行往坐臥時處諸縁をきらハす、身口の」不浄をきらハぬ行にて、易行往生と申候也、」たゝし、心をきよくして申を、第一の行と申」候なり、人をもさやうに御すゝめ候へし、ゆめ〳〵」この御心は、いよ〳〵つよくならせ給候へし、」

一、念佛の行を信せさらん人にあひて、御物語」候ハされ、いかにいハんや、宗論候へからす、強に」異解吴學の人を見て、これあなつりそしる事」候へからす、いよ

〳〵をもき罪人になさむこと、」不便に候へし、極樂をねかひ念仏を申さむ」人をハ、塵刹のほかなりとも、父母の慈悲におとらす」思食へきなり、今生の財寶ともしからむ人をハ、」ちからをくはへさせ給へし、もし、すこしも念仏」に心をかけ候ハん人をは、いよ〳〵御すゝめ候へし、」これも弥陀如来の、本願のミやつかひと思食候へし、」震旦日本の聖教をとりあつめて、このあひたひらき」見、かんかへ候に、念佛を信せぬ人は、先生に」おもき罪をつくりて、地獄にひさしくありて、」又地獄へかへるへき人なり、返ゝ専修念佛を現當」のいのりとハ申候へき也、一ゝの詞、これ經論」にて候也、御うちの人には、九品の業を、人に」したかひて、たえぬへきほとに御すゝめ候へし、」あなかしこ〳〵、已上略抄」

鎌倉の二品禅尼念仏往生のことを法然上人に尋ねる、その返事

釈文

勧化上都に盛りにして、道徳辺鄙に及びしかば、鎌倉の二品禅尼（金剛戒）、帰依最も深くして、蓮上房尊覚を使いとして、念仏往生の事尋ね申されたりければ、彼の御返事に云く、「御文詳しく承り候いぬ。さては念仏の功徳をば、仏も、説き尽くし難しと宣えり。又、智恵第一の舎利弗、多聞第一の阿難も、念仏の功徳は知り難しと宣いし広大の善根にて候えば、まして源空

六字の中に、一切の行は収まる

等 申し尽くすべしとも覚え候わず。弥陀の昔 誓い給いし本願は、遍く一切衆生の為なれば、有智・無智、有才・無才、善人・悪人、持戒・破戒、貴き・賤しき、男・女も隔てず、若しは仏の在世の衆生、若しは仏の滅後の衆生、若しは釈迦の末法万年の後、三宝皆失せて後の衆生までも、唯念仏ばかりこそ、現当の祈りになり候めれ。この故に、来りて往生の道を尋ね候 人には、有智・無智を申さず、一途に専修念仏を勧め候 なり。まして左様に、専修念仏申し留めなんと仕る人は、仏法の眼しいて、解脱を失えり。闡提の輩 なり。如何に申し候 とも、御変改候 べからず。強ちに信ぜざらむ人を、御勧め 候べからず。仏も叶い給わざる事なり。

一、異解の人の、余の善根を修せむに御助成ありて、思食すべき様は、我はこれ一向専修にて、決定 往生すべき身なり。他人の遠き道を、我が近き道に結縁せさせむと思し召さば、専修を妨げ候わず。

一、この世の祈りに、念仏の外に、仏にも神にも申し、経を読み書き、仏を造らむは、専修を障うる行にては候 べからず。

一、念仏を申し候 事は、様々の義候えども、唯、六字を唱うる中に、一切の行は収まり候 なり。心には本願を憑み、口には名 号を唱え、手には念珠を執る

易行往生

宗論すべからず

弥陀如来の本願の宮仕え

専修念仏は、現当の祈り

ばかりなり。常に心を掛くるが、究めたる決定往生の業にて候也。念仏の行は、元より行往坐臥、時処諸縁を嫌わず、身・口の不浄を嫌わぬ行にて、易行往生と申し候也。但し、心を浄くして申すを、第一の行と申し候なり。人をも左様に御勧め候べし。努々この御心は、愈々強くならせ給い候べし。

一、念仏の行を信ぜざらん人に会いて、御物語候わざれ。如何に況や、宗論候べからず。強ちに異解・異学の人を見て、これ侮り謗る事候べからず。愈々重き罪人に為さむ事、不便に候べし。極楽を願い念仏を申さむ人をば、塵刹の外なりとも、父母の慈悲に劣らず思食すべきなり。今生の財宝乏しからむ人をば、力を加えさせ給うべし。若し、少しも念仏に心を掛け候わん人をば、愈々御勧め候べし。これも弥陀如来の本願の、宮仕いと思食し候べし。震旦・日本の聖教を取り集めて、この間開き見、勘え候に、念仏を信ぜぬ人は、先生に重き罪を造りて、地獄に久しく在りて、又地獄へ帰るべき人なり。返す返す専修念仏を、現当の祈りとは申し候べきなり。一々の詞、これ経論にて候也。御内の人には、九品の業を人に従いて堪えぬべき程に御勧め候べし。あなかしこあなかしこ」（已上、略抄）。

〔第二段〕　詞書

上野國の御家人、大胡の小四郎隆義、在京の時、」吉水の禅室に參して上人の勸化にあつかり、」ふかく念佛を信受しけるか、下國の後、なを不審」なる事侍りて、上人給仕の弟子、澁屋の七郎」入道道遍かもとへたつね申たりけるを、道遍、」上人に申入て、おほせをつたへて、三心以下の事、」こまかに申つかハしけり、隆義か子息、大胡の大郎」實秀、かの消息を相傳し、父のあとをおいて、」稱名の行おこたりなかりけるか、念佛の安心不審」なる事侍りて、小屋原の蓮性を使者として、」上人にたつね申たりけれは、真觀房を執筆と」して、かきつかハされける状云、御文こまかに」うけたまはり候ぬ、はるかなるほとに、念仏の」事きこしめさむかために、わさとつかひをあけ」させ給て候御念佛のこゝろさしのほと、返ゝも」あハれに候、さてはたつねおほせられて候念仏の」事は、往生極樂のためにハ、いつれの行といふとも、」念佛にすきたる事は候ハぬなり、そのゆへハ、」念仏はこれ弥陀の本願の行なるかゆへなり、本願と」いふは、阿弥陀佛のいまた仏にならせ給ハさりし」むかし、法蔵菩薩と申しいにしへ、佛の國土を」きよめ、衆生を成就せむかために、世自在王如来と」申仏の御まへにして、四十八願をおこし給し」その中に、一切衆生の往生のた

めに、一の願を」おこし給へり、これを念仏往生の本願と申なり、」則、無量壽經の上巻にいはく、設我得佛、十方衆生、」至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺上已」善導和尚この願を尺しての給はく、若我成佛、十方衆生、」稱我名号、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現、」在世成佛、當知本誓、重願不虚、衆生稱念、必得往生上已」念佛といふは、仏の法身を憶念するにもあらす、」佛の相好を觀念するにもあらす、たゝ心をいた」して、もはら阿弥陀佛の名号を稱念する、これを」念佛とは申なり、かるかゆへに稱我名号といふ也、」ねんふつのほかの一切の行ハ、これ弥陀の本願に」あらさるかゆへに、たとひ目出たき行なりと」いへとも、念佛にハをよハさるなり、おほかたその國に」むまれんとおもハんものハ、その仏のちかひにしたかふ」へきなり、されは弥陀の浄土にむまれんとおも」はむものは、弥陀の誓願にしたかふへきなり、本願の」念仏と、本願にあらさる餘行と、さらにたくらふ」へからす、かるかゆへに往生極樂のためにハ、念仏の行に」すきたるハ候はすと申なり、往生にあらさる」みちにハ、餘行又つかさとるかたあり、しかるに、」衆生の生死をはなるゝみち、仏のをしへさま〳〵に」多候へとも、このころ、人の生死をはなれ、三界を」いつる道ハ、たゝ極樂に往生し候はかりなり、この」むね聖教のおほきなることハりなり、次に、極樂に」往生するに、その行やう〳〵に多候へとも、

我ホか往生」せむ事、念佛にあらすハ、かなひかたく候也、そのゆへは、」念佛ハ仏の本願なるかゆへに、願力にすかりて往生する」事はやすし、されは詮するところ、極樂にあらすハ、」生死をはなるへからす、念佛にあらすハ、極樂へむまる」へからさるものなり、ふかくこのむねを信せさせ給て、」一すちに極樂をねかひ、一すちに念仏して、このたひ」かならす生死をはなれんとおほしめすへきなり、」又、一ゝの願のをハりに、もししからすハ正覺をとらしと」ちかひ給へり、しかるに阿弥陀佛、ほとけになり給て」よりこのかた、すてに十刧をへ給へり、まさにしるへし、」誓願むなしからす、しかれは衆生の稱念するもの、一人も」むなしからす往生する事をう、もししからすは、」たれか仏になり給へる事を信すへき、三寶滅盡の」ときなりといへとも、一念すれハなを往生す、五逆深重」の人なりといへとも、十念すれハ往生す、いかにいはむや、」三寶の世にむまれて、五逆をつくらさる我ホ、弥陀の」名号をとなへんに往生うたかふへからす、いまこの」願にあへる事ハ、まことにこれおほろけの縁にあらす、」よく〳〵よろこひおほしめすへし、たとひ、又あふと」いへとも、もし信せされは、あはさるかことし、いまふかく」この願を信せさせ給へり、往生うたかひ思食へから」す、かならす〳〵ふた心なく、よく〳〵御念仏候て、」このたひ生死をはなれ、極樂にむまれさせ給へし、」又觀無量壽經にいはく、一ゝ光明、遍照十

方世界、」念佛衆生攝取不捨已上、これは光明、たゝ念仏の」衆生をてらして、よの一切の行をハてらさすといふ」なり、たゝしよの行をしても、極樂をねかハゝ、仏の光てらして攝取し給へし、いかゝたゝ念仏のもの」はかりをゑらひててらし給へるや、善導和尚」尺しての給ハく弥陀身色如金山、相好光明照十方、」唯有念佛蒙光攝、當知本願寔為强已上、念仏ハこれ」弥陀の本願の行なるかゆへに、成佛の光明、かへりて」本地の誓願をてらし給也、餘行ハこれ本願に」あらさるかゆへに、弥陀の光明きらひててらし」たまはさるなり、いま極樂をもとめむ人ハ、本願の」念佛を行して、攝取の光にてらされんと思食へし、」これにつけても念仏大切に候、よく〳〵申させ給へし、」又釋迦如来、この經の中に、定散のもろ〳〵の行を」ときをハりてのちに、まさしく阿難に付属し」給ときにハ、かみにとくところの散善の三福」業、定善の十三觀をハ付属せすして、たゝ念佛の」一行を付属し給へり、經にいはく、佛告阿難、汝」好持是語、持是語者、即是持無量壽佛名、已上、善導」和尚この文を尺しての給はく、從佛告阿難汝好」持是語已下、正明付属弥陀名号、流通於遐代、上来、」雖説定散両門之益、望佛本願、意在衆生一向専稱」弥陀佛名、已上、この定散のもろ〳〵の行ハ、弥陀の本願」にあらさるかゆへに、尺迦如来の往生の行を付属」し給に、よの定善散善をは付属せすして、念仏は」これ弥陀の本願なるかゆへに、まさしくゑら

ひて」本願の行を付属し給へるなり、いま尺迦の」をしへにしたがひて、往生をもとむるもの、付属の」念佛を修して尺迦の御心にかなふへし、これにつけても、」又よく〳〵御念仏候て、仏の付属にかなはせ給へし、」又六方恒沙の諸佛舌をのへて、三千世界におほひて、」もはらたゝ弥陀の名号をとなへて往生すといふは、」これ真實なりと證誠し給なり、これ又念仏ハ弥陀の」本願なるかゆへに、六方恒沙の諸佛、これを證誠し給、」餘の行ハ本願にあらさるかゆへに、六方恒沙の諸仏證誠」し給はす、これにつけてもよく〳〵御念仏候て、弥陀の」本願、釋迦の付属、六方の諸佛の護念を、ふかくかう」ふらせ給へし、弥陀の本願、尺迦の付属、六方の諸佛」の護念、一ゝにむなしからす、このゆへに念佛の行は、」諸行にすくれたるなり、又善導和尚ハ弥陀の」化身なり、浄土の祖師おほしといへとも、たゝひとへに」善導による、往生の行おほしといへとも、おほきに」わかちて二とし給へり、一にハ専修、いはゆる念仏也、」二には雜修、いはゆる一切のもろ〳〵の行なり、上にいふ」ところの定散不これなり、往生礼讃云、若能如上、念ゝ」相續、早命為期者、十即十生、百即百生、已上、専修と雜行」との得失なり、得といふハ往生する事をう、いはく、」念佛するものは、十ハすなはち十人なから往生し、」百ハすなハち百人なから往生すといふこれなり、失と」いふハいはく、往生の益をうしなへるなり、雜行の」ものは、百人か

中に、まれに一二人往生する事を」えて、そのほかは生せす、千人か中に、まれに三五人」むまれて、その餘ハむまれす、専修のものハ、ミなむま」るゝ事をうるはなにのゆへそ、阿弥陀佛の本願に」相應せるかゆへなり、尺迦如来のをしへに随順せるか」ゆへなり、雑業のものハ、むまるゝ事すくなきは」なにのゆへそ、弥陀の本願にたかへるゆへなり、尺迦」のをしへにしたかハさるゆへなり、念仏して、浄土を」もとむるものハ、二尊の御心にふかくかなへり、雑修を」して、浄土をもとむるものハ、二佛の御心にそむけり、」善導和尚二行の得失を判せる事、これのミに」あらす、觀經の疏と申ふミの中に、おほく得失を」あけたり、しけきかゆへにいたさす、これをもて」しるへし、おほよそ、この念仏ハ、そしれるものは」地獄にをちて、五刧苦をうくる事きハまりなし、」信するものは、浄土にむまれて、永刧の樂をうくる」事きハまりなし、なを〳〵いよ〳〵信心をふかく」して、ふた心なく念仏せさせ給へし、くハしき」事御ふミにつくしかたく候、この御つかひ申候へし、」正月廿八日源空、已上、實秀この消息を恭敬頂戴」して、一向に念仏す、寛元四年、往生のとき、吴香を」かき、音樂をきくものおほかりき、實秀か妻室、又」ふかくこの消息のをしへを信受して、稱名の」行をこたりなく、つゐに竒瑞をあらハし、」往生の素懐を遂けるとなむ、」

大胡の小四郎隆義

渋谷（屋）の七郎入道道遍

大胡の太郎実秀

真観房執筆の上人の返状

法蔵菩薩

世自在王如来

釈文

上野国の御家人、大胡の小四郎隆義、在京の時吉水の禅室に参じて、上人の勧化に与り、深く念仏を信受しけるが、下国の後、猶不審なる事侍りて、上人給仕の弟子、渋屋の七郎入道道遍が許へ尋ね申したりけるを、道遍、上人に申し入れて、仰せを伝えて、三心以下の事、細かに申し遣わしけり。隆義が子息、大胡の太郎実秀、彼の消息を相伝し、父の跡を追いて称名の行怠りなかりけるが、念仏の安心不審なる事侍りて、小屋原の蓮性を使者として、上人に尋ね申したりければ、真観房を執筆として書き遣わされける状に云く、「御文細かに承り候いぬ。遥かなる程に、念仏の事聞し召さむが為に、態と使いを上げさせ給いて候。御念仏の志の程、返す返すも哀れに候。さては尋ね仰せられて候念仏の事は、往生極楽の為には、何れの行というとも、念仏に過ぎたる事は候わぬなり。その故は、念仏はこれ弥陀の本願の行なるが故なり。本願というは、阿弥陀仏の未だ仏にならせ給わざりし昔、法蔵菩薩と申しし古、仏の国土を浄め、衆生を成就せむが為に、世自在王如来と申す仏の御前にして、四十八願を起こし給いしその中に、一切衆生の往生の為に、一つの願を起こし給えり。これ

念仏往生の本願

を念仏往生の本願と申すなり。則ち『無量寿経』の上巻に云く、「設し我仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信楽して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覚を取らじ」（已上）。善導和尚この願を釈して宣わく、「若し我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること、下十声に至るまで、若し生ぜずんば正覚を取らじ。彼の仏、今現に世に在して成仏し給えり。当に知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば、必ず往生することを得」（已上）。念仏というは、仏の法身を憶念するにもあらず、仏の相好を観念するにもあらず、唯、心を致して、もっぱら阿弥陀仏の名号を称念する、これを念仏とは申すなり。かるが故に称我名号という也。念仏の外の一切の行は、これ弥陀の本願にあらざるが故に、仮令、目出度き行なりと雖も、念仏には及ばざるなり。大方その国に生まれんと思わん者は、その仏の誓いに従うべきなり。されば、弥陀の浄土に生まれんと思わむ者は、弥陀の誓願に従うべきなり。本願の念仏と、本願にあらざる余行と、さらにた比ぶべからず。かるが故に往生極楽の為には、念仏の行に過ぎたるは候わずと申すなり。往生にあらざる道には、余行又司る方あり。然るに衆生の生死を離るる道、仏の教さまざまに多く候えども、この頃、人の生死を離れ、三界を出ずる道は、唯極楽に往生し候ばか

称我名号

弥陀の誓願に従うべき

往生は、念仏にあらずば叶い難し

不取正覚

二心なく念仏

りなり。この旨、聖教の大きなる理なり。次に極楽に往生するに、その行様々に多く候えども、我等が往生せむ事、念仏にあらずば、叶い難く候也。その故は、念仏は仏の本願なるが故に、願力に縋りて往生する事は易し。されば詮ずる所、極楽にあらずば、生死を離るべからず、念仏にあらずば、極楽へ生まるべからざるものなり。深くこの旨を信ぜさせ給いて、一途に極楽を願い、一途に念仏して、この度必ず生死を離れんと思し召すべきなり。又、一々の願の終わりに、「若し然らずば、正覚を取らじ」と誓い給えり。然るに阿弥陀仏、仏になり給いてより此の方、既に十劫を経給えり。当に知るべし、誓願虚しからず。然れば、衆生の称念する者、一人も虚しからず往生する事を得。若し然らずば、誰か仏になり給える事を信ずべき。三宝滅尽の時なりと雖も、一念すれば猶往生す。五逆深重の人なりと雖も、十念すれば往生す。如何に況や三宝の世に生まれて、五逆を造らざる我等、弥陀の名号を唱えんに、往生疑うべからず。今この願に遇える事は、真にこれ朧げの縁にあらず。能く能く喜び思し召すべし。仮令、又遇うと雖も、若し信ぜざれば、遇わざるが如し。今深くこの願を信ぜさせ給えり。往生疑い思食すべからず。必ず必ず二心なく、能く能く御念仏候いて、この度生死を離れ、極楽に生まれさせ給うべし。又、『観無量寿経』に云

光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨

弥陀身色如金山

余行は本願にあらず

汝好持是語

く、「一々の光明 遍く十方の世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」（已上）。これは光明、唯念仏の衆生を照らして、余の一切の行をば照らさずというなり。但し余の行をしても、極楽を願わば、仏の光照らして摂取し給うべし。如何、唯念仏の者ばかりを選びて照らし給えるや。善導和尚釈して宣わく、「弥陀の身色は金山の如し、相好の光明 十方を照らす。唯念仏のみ有りて光摂を蒙る。当に知るべし、本願最も強しとなす」と（已上）。念仏はこれ弥陀の本願の行なるが故に、成仏の光明、却りて本地の誓願を照らし給う也。余行はこれ本願にあらざるが故に、弥陀の光明、嫌いて照らし給わざるなり。今、極楽を求めむ人は、本願の念仏を行じて、摂取の光に照らされんと思食すべし。これに就けても、念仏大切に候。能く能く申させ給うべし。又、釈迦如来この経の中に、定・散の諸々の行を説き終わりて後に、正しく阿難に付属し給う時には、上に説く所の散善の三福業、定善の十三観をば付属せずして、唯念仏の一行を付属し給えり。『経』に云く、「仏、阿難に告げたまわく、汝好く是の語を持て。是の語を持てとは、即ち是れ無量寿仏の名を持てとなり」（已上）。善導和尚この文を釈して宣わく、「仏告阿難汝好持是語より已下は、正しく弥陀の名号を付属して、遐代に流通せんことを明かす。上来、定・散両門の益を説くと雖も、

念仏は弥陀の本願

釈迦の御心に叶ふ

六方諸仏証誠

弥陀の本願

釈迦の付属

諸仏の護念

善導は弥陀の化身

専修念仏

雑修諸行

仏の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」（已上）。この定・散の諸々の行は、弥陀の本願にあらざるが故に、釈迦如来の往生の行を付属し給うに、余の定善・散善をば付属せずして、念仏はこれ弥陀の本願なるが故に、正しく選びて本願の行を付属し給えるなり。今、釈迦の教えに従いて、往生を求むる者、付属の念仏を修して、釈迦の御心に叶うべし。これに就けても又、能く能く御念仏候いて、仏の付属に叶わせ給うべし。又、六方恒沙の諸仏舌を舒べて、三千世界に覆いて、専ら唯弥陀の名号を唱えて往生すというは、これ真実なり、と証誠し給うなり。これ又、念仏は弥陀の本願なるが故に、六方恒沙の諸仏、これを証誠し給う。余の行は本願にあらざるが故に、六方恒沙の諸仏証誠し給わず。これに就けても、能く能く御念仏候いて、弥陀の本願、釈迦の付属、六方の諸仏の護念を、深く被らせ給うべし。弥陀の本願、釈迦の付属、六方の諸仏の護念、一々に虚しからず。この故に念仏の行は、諸行に優れたるなり。又、善導和尚は、弥陀の化身なり。浄土の祖師多しと雖も、唯偏に善導による。往生の行多しと雖も、大きに分ちて二とし給えり。一には専修、所謂念仏也。二には雑修、所謂一切の諸々の行なり。上に言う所の定散等これなり。『往生礼讃』に云く、「若し能く上の如く、念々相続して畢命を期

十即十生
百即百生

念仏を謗るは、地獄に堕ちて五劫苦を受く

とする者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」（已上）。専修と雑行との得失なり。得というは往生する事を得。云く、「念仏する者は、十は則ち十人ながら往生し、百は則ち百人ながら往生す」というこれなり。失というは、云く、往生の益を失えるなり。雑行の者は、百人が中に、稀に一、二人往生する事を得て、その外は生ぜず。千人が中に、稀に三、五人生まれて、その余は生まれず。専修の者は、皆生まるる事を得るは何の故ぞ。阿弥陀仏の本願に相応せるが故なり。釈迦如来の教えに随順せるが故なり。雑業の者は、生まるる事少なきは何の故ぞ。弥陀の本願に違える故なり。釈迦の教えに従わざる故なり。念仏して、浄土を求むる者は、一尊の御心に深く適えり。雑修をして、浄土を求むる者は、二仏の御心に背けり。善導和尚二行の得失を判ぜる事、これのみにあらず。『観経の疏』と申す文の中に、多く得失を挙げたり。繁きが故に出ださず。これをもて知るべし。凡、この念仏は、謗れる者は地獄に堕ちて、五劫苦を受くる事極まりなし。信ずる者は、浄土に生まれて、永劫の楽を受くる事極まりなし。猶々愈々信心を深くして、二心なく念仏せさせ給うべし。詳しき事、御文に尽くし難く候。この御使い申し候べし。正月二十八日　源空」（已上）。実秀、この消息を恭敬頂戴して、一向に念仏す。寛元四年、往生の時、異香を

嗅ぎ、音楽を聞く者多かりき。実秀が妻室、又深くこの消息の教えを信受して、称名の行怠りなく、遂に奇瑞を現わし、往生の素懐を遂げけるとなむ。

〔第三段〕　詞書

武蔵國那河郡の住人、弥次郎入道（不注實名）は、上人の」教誡をかうふりて、一向専念の行人となりにけり、」たまはるところの御消息を秘蔵して、出離の」指南になむそなへ侍ける、かならすしも数反を」さためす、おもひいてたるかとおほしくてハ、つねに」西にむかひて高聲にそとなへける、病悩のとき、」八月廿九日（不注年）に、近隣なる僧蓮臺房、きたり」とふらひけれは、この所勞ハ日ころねかふところ」なり、明後日来臨し給へ、申へき事侍りと申」けり、その日、又まかれるに、明後日辰時に、極樂に」むまるへしと申あひた、いかにして、さはしり給へる」そとゝへは、その事なり、夢に墨染のころも」着したる僧、青白二莖の蓮花をもちてきた」れりつるか、白蓮華をわれにさつけて、これは」汝が分なり、この青蓮花ハ、新田の太郎か分なりと」仰られつるに、白蓮華のうへに又こゑありて、」九月三日の辰时に往生すへしといふとみて、」さめぬるなりといふ、ことのやうたとくおほへて、」三日又ゆきむかふに、病者のいはく、往生すてに」ちかつけり、よくきたり給へり、四十九日のあひた」は、

こゝに住して念佛したまふへし、御房ハ、わか」善知識なり、年来秘蔵のもの、附属したて」まつるへしとて、上人より給ところの御消息、ならひ」に和字にしるせる念仏安心の書ゑこれをわたす、」その〻ち、あひともに晨朝の礼讃を行するに、」光舒救毗沙の句にいたりて、礼讃をとゝめて、」念佛三遍となへて、端坐合掌していきたえに」けり、四十九日の夜、蓮臺房ゆめにみるやう、かの禅門か」持佛堂かとおほしき堂あり、まへに池なとありて」あるへかしくみゆるに、さしいりて拝すれハ、金色」の阿弥陀如来、壇のうへに立給へり、堂の下にハ」念仏するこゑありけり、承仕なといふはかりなる」ものさしいて〻、このこゑハ閻浮提なり、たゝいま」この池のなかに、蓮花生すへし、これをみるへしと」いふこゑに應して、白蓮花出生す、念仏のこゑに」したかひて、蓮華忽にひらく、この花のうへに」亡者の禅門、墨染の衣をきて坐せり、时に」微風この花をふくに、風にしたかひてなひ」き〻たる、禅門蓮花よりをりてかたりていはく、」われ極樂の下品下生に生せり、たゝいま上品に」すゝむなり、といふとみて、夢さめにけり、」

釈文

武蔵国那珂郡の住人、弥次郎入道（実名を注せず）は、上人の教誡を被り

武蔵国の弥次郎入道、夢の告により死期を知って念仏往生すること

蓮台房

て、一向専念の行人となりにけり。賜る所の御消息を秘蔵して、出離の指南になむ備え侍りける。必ずしも数遍を定めず、思い出でたるかと思しくては、常に西に向かいて高声にぞ唱えける。病悩の時、八月二十九日（年注せず）に、近隣なる僧蓮台房、来り訪いければ、「この所労は日頃願う所なり。明後日来臨し給え、申すべき事侍り」と申しけり。その日、又罷れるに、「明後日辰時に、極楽に生まるべし」と申す間、「如何にして、さは知り給えるぞ」と問えば、「その事なり、夢に墨染めの衣着したる僧、青・白二茎の蓮華を持ちて来れりつるが、白蓮華を我に授けて、これは汝が分なり。この青蓮華は、新田の太郎が分なりと仰せられつるに、白蓮華の上に又声ありて、九月三日の辰時に往生すべしと言うと見て覚めぬるなり」と言う。事の様貴く覚えて、三日又行き向かうに、病者の云く、「往生既に近付けり。能く来り給えり。四十九日の間は、ここに住して念仏し給うべし。御房は、我が善知識なり。年来秘蔵の物、付属し奉るべし」とて、上人より賜う所の御消息、並びに和字に記せる念仏安心の書等これを渡す。その後、相共に晨朝の礼讃を行ずるに、「光舒救毘沙」の句に至りて、礼讃を止めて、念仏三遍唱えて、端坐合掌して息絶えにけり。四十九日の夜、蓮台房夢に見る様、彼の禅門が持仏堂かと思しき堂あり。前に池などありてある

善知識

和字の念仏安心の書

晨朝礼讃

べかしく見ゆるに、差し入りて拝すれば、金色の阿弥陀如来、壇の上に立ち給えり。堂の下には念仏する声ありけり。承仕などいうばかりなる者差し出でて、「この声は閻浮提なり。唯今この池の中に、蓮華生ずべし。これを見るべし」と言う声に応じて、白蓮華出生す。念仏の声に従いて、蓮華忽ちに開く。この花の上に亡者の禅門、墨染めの衣を着て坐せり。時に微風この花を吹くに、風に従いて靡き来る。禅門、蓮華より降りて語りて云く、「我極楽の下品下生に生ぜり。唯今上品に進むなり」と言うと見て、夢覚めにけり。

〔奥書〕

二十五巻折紙数廿二丁

四十八巻繪傳　知恩院
常住